「どうして、まだ十分の一も出來ないよ、全體さう早く出來る原稿を文雅堂は僕に望むのかね、さうぢやァあるまい、第一この僕は原稿料に依ッて筆を執らないからね、もし僕の文字を金錢で買はうとすれば、一枚の草稿は文雅堂の財産を傾け盡しても足らないよ、山口星影といふ一個の詩人が文雅堂といふ一個の書肆より出版するものと思ッては不可ない、つまり不換金の國寶に等しいもンだからね、早く書いて早く賣ッて早く算盤珠に利益を認めンとすれば、宜しく他の文士に依賴すべしだ、僕の著は後世、僕の銅像が自然美の結晶體に依ッて築かるゝ時、始めて驚くべき價値が出るンだ」

「へエ、なるほど、先生の銅像が出來るまで、へエ、なるほど、いや主人へ其邊を篤と念のため申し聞けますが、實は主人も内心、覺悟して居るかも知れませンよ、先生の原稿料その他の出版費用に限ッて、收支決算の嚴しい店の帳面には一切、記入

して御坐いませンからな」

「や、文雅堂の主人、話せるわい、案外、俗物でも無いね」

「ところで先生、國寶の御脱稿は、いつ頃になりませうか」

「まづ三年だね」

「三年、先生、一册で御坐いますよ、百四五十ページの原稿が三年と仰しやるンですか、三年」

「一日一行づつの割合で一年三百六十五行だ、一ページ十五行として二十四ページ餘になるから三年で七十何ページ、いや三年で出來ない、六年かゝるよ」

「えッ、六年、しかし先生、失禮ながら原稿料、いや御謝禮は過日、差上げました二十五圓の外、もはや差上げ兼ねますが、御承知で御坐いませうな」

「安心してくれ、故國に無盡藏の不動産があるよ、はゝゝゝ」

文雅堂の店員、もとより文士の催促係に選ばれて走せ廻るほどの男、あらゆる文壇の大天狗中天狗小天狗より木葉天狗の鼻息にまで馴れ切ッて、いかな暴風雨にも吹き飛ばされぬ奴ながら、山口星影先生には流石に驚いて平生の勇氣もなく、あッと呆れしまゝ一散に遁げ出しぬ、

銅像と國寶と六年の連發銃を喰うて、生命からゞ〳〵文雅堂の店員が飛び出せし後、そッと差覗きしは例の瀬田とよ子、衣類は何とせん方もない其まゝながら、久しぶりの湯に入りて身の垢を洗ひ落せば、元來の色白丸顔、面ばかりは女めいたり、

「先生、大變この頃は、しきりに御勉強です事ね」

あまり親しく交はらねど、わづか六尺を隔てゝ朝夕に顔を見合はせつゝ、もし雙方より伸ばせば手と手を握り合ふべき間柄、星影先生、俄聾にもなり得ず振り返りぬ、

「はゝゝゝ別に際立ッて、勉強するといふでも無いですが、已むを得ず、或書肆に迫られましてね」

「おや、御著述ですの」

「困りますよ、折角こゝに隠れて居たのを、つい見付け出されて、つまり書肆のために致される結果ですからね、はゝゝゝだが賣文の徒に陷らないだけで、自から慰めて居ますよ」

「いくら隠れて在らしッても先生、海の中の眞珠は、どうせ世の中へ無理に出されるもので御坐いますよ、ほゝゝゝ」

「海の中の眞珠、や、この長屋で他の者より聞く事の出來ない言葉です、やはり教育が言はせるンですな、はゝゝゝまア貴孃、お上りなさいよ」

「御免あそばせ、何、妾どもに教育が、しかし先生、もし御寸暇な時でもあらッしや

いまして、お蒼蠅くない節は、妾どもに解し得られる程度で、をり〳〵御高説を伺ひたう御坐いますことよ、實は以前から絶えず常に、さう思ッて居りましたのですが、あまり失禮だと存じて、願ひ兼ねましたの」

「はゝゝゝかうして筆は執ッてるもンの、なアに暇があッて、差支のない人間ですから、をり〳〵説の奈何に關せず語りませう、語ッても外の奴は分らないで困る、はゝゝゝ」

「あら嬉しいこと、先生、是非、伺ひますよ」

「よろしい」

「早速ですが先生、妾、どう考へても考へられないで、迷ッてる事が御坐いますの、たゞ一言にいへば何でも無いやうですが、研究すれば、するほど猶更ら其理を失ッて、ます〳〵解釋に苦しむ事が御坐いますの、ほゝゝゝ」

「はゝア、どういふ事ですな」

「先生、これは事實の上よりも妾、詩的の御解釋を願ひたくッて」

「詩的、こりやァ面白い、何です」

「戀」

星影先生、豆鐵砲を喰ひし鳩の如く、たゞ眼鏡越に眼球ばかり動かして、ぱち〳〵と光らせぬ、

文雅堂の店員は星影先生のために驚いて逃げ出せば、星影先生は今この瀬田とよ子のために驚かされて、不意の眞正面より戀の解釋を迫らるゝや否、あッと辟易の體、されど事實の上よりも詩的の上に於てといふ、その詩的の二字に聊か力を得て、加之も答へずんば何とやら却ッて我程度を示すが如く、戀の卑近の醜態外に知らざるかと思はるゝ苦し紛れに、わざと容を正して悠々と説き出しぬ、

「この長屋中で、もし外の者の口より出れば、單に所謂る世俗の戀で、男女肉交的の言葉として聞きますが、教育ある貴孃の口よりは清く尊き神聖の戀として聞きますよ」

「あら先生、さう仰しやらなくッても、ほゝゝゝ」

「いや、この戀の解釋は、語るものゝ人物次第で雲泥の差を生じますからね」

「眞實で御坐いますよ、妾も、先生で無くッて、外の人に」

「さうでせう、さうありたいです、ところで、戀、これを僕の所信から說き出すと、凡そ今日の社會には殆ど皆無ですな、當時の詩人に詩なきが如く、戀するものに戀はありますまいよ」

「先生、もし、ありとすれば、どういふのが戀、そのものゝ本體でせう」

「さやう、まづ獸類鳥類その他の動物一切と、よほど遠く高く違ッた點が無くては叶ひませンよ」

「おや、今日の人間は鳥や獸と、さのみ違ッては居りませンの」

「まづ同じです、殆ど同一轍です、たゞ鳥獸の類は交接の期節を限られて、人間は交接の時期を限られないだけの事で、數の上に多少長短の差あるのみ、つまり行ふの事實に於ては同じ理ですよ、しかし人間は、一方に特殊の技能を與へられざる鳥獸よりも比較的、すべての萬事に智力が行き渡ッて居ますから、この肉體の交接に就いても種々の能書を附して、僧侶が木像の佛體に不思議の靈魂あるが如く說教すると一般、いろ〳〵の讃美歌を以て他を迷はし自己また迷ッてるンです、なアに僕の理想に照らせば、今日の人間に戀といふやうな高く貴いものはありませンな、皆これ虛僞の戀です」

「しかし先生、人の最も避けて恐るゝものは死で御坐いませう、それに先生、その死を喜び迎へて戀のために現世を去るものが御坐いますよ」

「はゝゝゝ涙管の曲ッた凡俗の同情に、所謂る獻身的の愛と稱せらるゝもンでせう、男女痴情の果に死を招く心中でせう、なるほど戀を一時の獸慾に供して、無事息災に生きながら相別るゝものに比して、少しは憐れむべき點もありますが、かの僧侶の説教に隨喜渇仰の涙を流して佛體の前に身を捧げる愚夫愚婦と同じ結果で、その佛體に靈魂ない以上、その戀が神聖でない以上、やはり無效です、そも〳〵僕の説に於ける戀なるものは、さういふ手輕な世の中の都合上で、汚れたる人間の自由自在に左右し得べからざるもンです」

山口星影先生　年齡こゝに二十九歳、そも〳〵生れて女なる者の談話の外に知るや否や、その邊は偖置いて、始めの辟易にも似ず、いよ〳〵人間放れの戀を神々しく説

き出しぬ、

「今いふ通りの理で、僕の戀なるものは今日の世間、到るところ滔々として懸河の如く行はるゝ戀、その輕便なる情慾的の作用とは天地の相違です、つまり今日の世態人情では到底、僕の理想に於ける戀は容易に得られませンよ、但し一言、斷ッて置きますが夫婦は戀でない、どれほど圓滿な夫婦でも、いかに愛情の溢れた夫婦でも、僕の所謂る戀には入れられない、ありやァ社會の組織上、人類繁殖の必要に應じただけの事です、だから戀なるもの、ます〳〵別に清く高く稀に珍なる所以で、なかなか叨りに雨の如く人間界へ下ッて來ませンよ」

「して見ると先生の戀は、とても人間として出來ない戀で御坐います事ね、圓滿な夫婦も戀を遂げたもので無いとすれば、事實、この世の中には無いもので御坐いますね」

「まづ、其邊です、この不完全な世の中に容れられて、この不節調な人間の自由に出來得る事が、どこに神聖を保てますか、神聖とは物質の外ですよ」

「では先生、戀は理想に止まるもので、どうしても到底、行へないンですか」

「行へない、行はれる戀は神聖の戀でない、手に取ッて行はれないところが、卽ち戀の神聖にして美の極なる理由で、いかに精巧を極めても自然の花は人工で出來ます まい、この良夜を奈何せんといふ淸風明月に等しいもンだ、仰げば我を忘れて心も空も冴え渡る月影に同化さるゝが如く、いはゆる羽化して登仙の感あらしむるもの、それが僕の理想に於ける戀です」

「しかし先生、行はれないにしても、淸風明月に同化さるゝ如く、やはり戀は單獨に生ずるものでは御坐いますまい、何か一方に其、戀を生ずる原因とか反照とか、つまり、神聖の對等物が御坐いませう、男ならば女のうちに」

「さ、それが迚も無いから、僕の戀は生涯、得られない、たゞ無形の理想に止めて置くンです」

「あら、先生、さうなンですか、始めて分りましたよ、つまり先生の理想に叶ッた實物がないから、神聖の戀は理想に止めたまゝ得られないものと諦めて居らッしやるが、少し下ッて社會の組織上、必要に應じて神聖外の戀は無妻主義でない以上、その時の都合次第で、それは格別だと仰しやるンですね、ほゝゝゝ妾また天女ででも無くッては御意に入らないかと思ひましてよ、ほゝゝゝ」

星影先生、あまり夢中に神聖を振り廻して、戀を人間外に持ち上げ過ぎて今更、聊か狼狽の體、

「や、また改めて其うち、お話しませう、どうも今日は頭腦の工合が、思ふやうに說が吐かれなくッて、前後、矛盾した事があるかも知れませンよ」

「いえ先生、大變よく分りまして、是非この上は近日、理想外の戀に就いて、つまり神聖以下の思召を伺ひたう御坐いますよ、御迷惑でも」

人間外の事は兎も角、浮世の事には先生よりも一枚上手の瀬田とよ子、ぐッと急所に釘を打ち込んで歸りぬ、

八方八當りに夜な〳〵人のため八卦を立つれど、年が年中を凹垂れて、いッかう我身の有卦に入らぬ朝鮮髯の幸運齋、名に反いた不運も貧乏も今年こゝに四十七、この年輩まで打ち續いては迚も浮ばぬものと自から諦めて、無念殘念よりも觀念のよい男、三度の飯よりは一盃の酒が飲みたいばかり、されど飯さへ滿足に喰へぬ境涯、なかなか酒には近づき難く、一月あまりも遠退きし此ごろは、さらぬも浮世の鉋に削り落されて元來の細い奴、いよ〳〵細く瘦せこけて肥料の足らざる體、あはれや日蔭の胡瓜

に似たり、

この日蔭胡瓜の向側は、ふしぎに瘦せもせず、ぶらりと小肥りの絲瓜野郎、例の鑛糞熱に浮かさるゝ西川要五郎とて、さらに要領を得た事のない男、たゞ九州の空を望んで十萬圓の二十萬圓のと饒舌るだけの藝を持ちし奴なり、

うらの畑に茄子と南瓜の喧嘩が御坐るといふ唄はあれど、これは表口より胡瓜が絲瓜の宿へ這ひ込ンで、同じ貧乏蔓の緣に離れぬ互の交際、何の隔意もなし、

「西川さン、どうですな」

「やァ八卦屋さン、どうも斯うもない、御覽の通りだ、至極安泰で、太平無事に罷り在るよ、隣屋の石作と違ッて、まめに毎日、ちよこ〳〵と出られない性分だからね、いよ〳〵こゝといふ大的の覘ひが付くまでは」

「なるほど、水深ければ容易に波紋を示さずといふンですかね、しかし石作さンは實

に感心だ、照ッても降ッても驚かず根氣よく出かけて、たとひ千三の方は出來なくッても、彼是する間で日に一度は必定、どッかで飯を喰ッて來るから、やはり營業になりますよ」

「はゝゝゝさういへば、兎も角そンなもンだが、空足ばかり踏ンで無駄骨の折れる營業さ、時に八卦屋さン、君の隣屋も空屋になッて結構だ、全體、どこへ落ち伸びたンでせう、がら〳〵と騷々しい奴等でしたよ、どうせ無目的だらうが、方角ぐらゐ卦に出ませンかな」

「や、彼奴等ァ西川さン、どことといふ方角の定まッた人間ぢやァありませンよ、箸にも棒にも掛らない奴だから無論、卦には上りませンさ、實に弱りましたね、あの三疋には、づう〳〵しくッて、いけ太くッて、性質の惡い上に嫌な屁理窟があッて、すれッからしで、血氣の奴等だから、壁一重の隣屋が堪らない、幸ひ身に傷こそ負

はなかッたが、酷い目に逢ひましたぜ、この幸運齋の怨恨だけでも彼奴等、滿足に死ねる筈がない」

「はゝゝゝ、その代りに今度ァ、氣立の優しい容色の美い小金を持ッた若後家でも引ッ越して來て、間の壁を打ち拔くやうになるかも知れませンぜ、はゝゝゝ」

「女といへば西川さン、さのみ今まで親しくなかッた例の亡者へ、この隣屋の廂髪が何だか妙に變な工合で、をり〳〵出這入するぢやァありませンか、をかしい樣子だ」

「をかしくッても、止める事は出來ないよ、先方の勝手だからね」

「なァに、妬くほどの男女でも無いが、ちよいと氣にかゝるもンでね、第一お目觸りだ、はゝゝゝ」

現世と未來の境目、いづれかといへば、現世の人間より未來へ近い亡者として、相手

にせざりし外の奴さへ、をかしいぞ、どうも變だと目に付くほどの事、壁一重の隣屋に住んで日本一の大先生と心得たる熊さン夫婦いかでか見遁すべき、互に聲を潜めて私語き合ひぬ、

「ねエ良人さン、茫然して居ちやァ濟まないよ、これが世間普通で、たゞの人なら雙方お互に出來合の御勝手さ、差支のない獨身が男女で金錢の入らないこッたから、高を括ッて面白半分に見物もして居れるが、あゝいふ邪氣のない風の變ッた先生に一方は良人さン、當節から油斷のならない廂髪だよ、それも先生が燒芋の蒂や麵麭屑の時なら、まだ少しやァ女の方に肩も持てるが、あの時分は對ひ合ッて唾も引ッかけない女がさ、此頃の芽を吹き出した先生へ俄に近しく出這入するなァ曲物だよ」

「なるほど、さう聞きやァ捨てゝ置けねエな、二疋の内、どッちの方だ、何、丸顔の

肥ッた方か、見るから蟲の好かねエ生意氣な女だな」

「眞實だよ、この長屋中で先生の味方ァ良人さンばかりだから、外の奴に手を拍ッて笑はれない先、何とかしてあげたいよ」

「しかし、いよ〳〵出來て仕舞ッたらしいかね」

「なァに、まだ出來た樣子が無いからさ、出來て仕舞ッちやァ良人さン、無效だよ、いふだけの甲斐がないよ、先生のためは今だよ、うるさく日に二三度づつ押掛けるやうだが、まだ序幕を開けて五六日にしかならないからね、幸ひ今のうちだよ」

「ぢやァ、しきりと牝が仕掛けてる最中だな、この熊さンに恐れ氣もねエで、ふざけた阿魔ッちよだ、畜生、ぶッ挫いてやらうか」

「お止しよ、そンな手荒な事をしては不可ないよ、女の方より先生の方さ、先生さへしてやられ無きやァ大丈夫だよ」

「だがね、先生が尋常の先生でねエから乃公が面と向ッて、こンな事に諍爭がましく騒げねエよ、外の事ァ兎も角、色戀の沙汰ァ別だからな」

「だッて、相手が惡いよ」

「よくッても惡くッても先生が、心で何と思ッてるかも知れねエからな、思案の外といふからさ」

「思案の外になッちやァ大變だよ、ならないうちに良人さン、眞實の親切が通るンだからね、もしまた年でも若きやァ、岡燒のやうになるが、ことし四十二の厄年で、かういふ立派な女房のある身體ぢやァないかね」

「四十二の厄年ァ善いが、はゝゝゝかういふ立派な女房は恐れ入ッたね、口を開いて他人樣に御披露の出來ねエ挨拶だ、いくら蟲が好かなくッても汝に比べて見りやァあの廂髪の方が優だぜ、はゝゝゝねエ嚊ァ御本人に相談だ」

「おや、この阿爺、どうかしたよ」

「はゝゝゝしかし年が違ッてるから無理もねエ、汝も若い時ァ隨分、ちよいと粹だッたよ、はゝゝゝ」

「上氣切らないうち、早く良人さン、先生の方へ出掛けなさいよ」

星影先生、鼻頭の眼鏡越に破天井を仰ぎながら、僕の理想に於ける戀の實物は今日の人間界になしと澄まし込んで、天下の女流一切を見ること糞壺の蛆蟲に等しきかと思へば、現在の事實、例の瀨田とよ子が以來こゝに蒼蠅く訪ひ來るを許して、さのみ蒼蠅くも感ぜぬ禮、さては先生、戀の目的物は女にあらずして、女は理想外でも神聖以下でも御意に觸らず御辛抱の出來る人格、寧ろ女の奈何に關せず女でさへあれば差支なしとの雅量もあるに似たり、

「先生」

そッと四邊を憚るが如く潛めし聲に力を入れて、加之も情を含み一種異樣の調を帶びし先生の一語まづ耳に入れば、寂寞無聲の木像に等しき大詩人、わざ〳〵筆を擱き俄に机の肱を放ちて、祕せど自然に歡迎の微笑を浮べながら振り返りぬ、

「前夜の雨で塵埃もなく、雨後の快晴は氣持の宜いもンですな」

「眞實ね、頭腦の中が洗はれたやうです事よ、かういふ日は先生お筆が進みませう」

「いや、賣文の徒と違ッて、筆ばかり進ンでも面白くないが、まア兎も角、詩味を損ぜないやうだ、時に瀨田さン、昨日の決心、どうなりました」

「實は先生それで伺ひましたの、どうしませう、いつまで、かうして居ても困ります から、やはり父兄の說に從ッて、田舍へ歸らうかとも思ひますが、しかし先生、遺憾ですよ、今さら故鄕へ歸ッて敎員なンかするくらゐなら、この長屋で半歲も苦痛

を忍びませンもの、こゝへ來る前に相當の風俗で歸りますもの、妾、どうしても嫌なの、こゝ三月の後には、妾に事實の同情を寄せてくれる方が、外交官の夫人になッてる舊友が是非、歸朝するンですからね、それまでは先生、眼前の小さい事に追はれて前途の大きい事を逸したくないンですよ」

自己の利害得失にさへ漠として人間放れの星影先生、まして他の俗事に眉を顰めて關すべき筈なけれど、平生の先生は暫く中止の體、さらに腕を組んで考へ出しぬ、

「むゝ一理ありますな、折角こゝまで堪忍して來て、その知己を待ち受けながら、わづか三月の今さら、田舍へ、なるほど、こりやア貴孃のために不得策だ、何とかして、このまゝ初志を繼續する工夫は無いンですか」

「實に恥づべき事ですが、もう此上にしやうが御坐いませンの、妾、一人なら先生まだ多少、しかし妾のために、こゝへ來る時、やはり妾と同じやうに父兄から呼び戻

された友達を、引き止めて今日まで同棲に居るンですもの」
「こゝ三月さへ凌げば、宜いンですな」
「三月の後には瀬田とよ子、こンな見苦しい風俗で、お目にかゝらない決心ですの先生」
「よろしい、僕が一考しよう、幸ひ或書肆の主人が、しきりに僕へ好意を、むしろ自己の利益上より過度の希望を抱いてる時だから、何とか工夫が出來るだらう、よろしい」
「あら、先生、妾、それでは妾、先生、いけませンの」
「なアに同じこッた、出來得る事に自他の別ない僕ですよ」
「だッて先生、妾、感謝の道に困りますもの女ですから」

「先生、此頃ア大層、御精が出ますッてね、さう一途に御勉強なすッちやア、却ッて身に觸りやアしませンかね、わッしやア稼ぎに出て居ませンが、うちの嚊アめ、酷く氣にして居ましたッけ、ちと湯にでも這入ッて按摩でも呼ンで、お揉ましなせエな、飛ンでも跳ねても音のしねエ野郎と違ッて、大事の御身體だ」
「はゝゝゝ言々句々、實に愛すべき人だな、好意は謝するが、さう身に觸るほど勉強もしないよ」
「しかし先生、人といふものア、何か一物、誰でも道樂のあるもンでせう、道樂と言ッちやア變だが、全體、先生の樂みア何ですい」
「さう聞かれると、聊か困るが、まづ適意これ娯樂だね」
「何ですッて、わかりませンよ、そンな持ッて廻ッた面倒な言葉ア」
「はゝゝゝ持ッて廻ると却ッて面倒だ、適意とは自己の心に適した事だよ」

「へエどうしても先生は一風、變ッてますな、凡そ世の中に味方より敵が娯樂たァ」
「や、また間違ひが始まッた、敵ぢやァない、適だよ、適すると言ッてね、自己の意に叶ッた事、我心に合ッて氣に入ッた事をいふのさ」
「でせう、さうなくッちやァならねエ筈だ、をり〳〵先生、紛らはしい妙な言葉が出るから、此方で面くらッて、とンちンかンな事になるンですよ、ところで先生、そこだ、何が一番、心に叶ッて氣に入ッてますね、早い談話が先生、この長屋中の人間にしてさ」
「僕の適意は、元來さういふ形のあるもンで無いが、もし長屋中で心に叶ッた氣に入ッた人といへば、無論いふまでもなく君だよ」
「ありがてエ、そこで二番手は誰です、何奴ですい」
「はゝゝ、露骨にいへば、いづれも皆これ眼中になしだ、殆ど有無に關せない、あゝ

ても無くても同じ事だよ、取るに足らないね、はゝゝゝ」
「その、あッても無くても、同じ中に、少しやァ先生、あッても差支のねエ人間があるでせう」
「皆無、ないね」
「先生、そいつァ怨恨だ、何故この熊に先生、お祕しなさるンですい、近頃あの廂髪の肥ッた方が、ちよこ〳〵身輕に出這入するといふぢやァありませンか、出這入しても宜うがすがね先生、長屋の奴等ァ針を棒に口が蒼蠅えから、あまり目立たないやう願ひますぜ、目に付いて自慢の出來る相手なら兎も角、あれぢやァ先生の估券が下りますよ、なるほど女は女に相違ねエでせうが、も少し何とか女らしくッて、面の裏表も先生、はッきりと判ッた女をね、あゝいふ鑄型ァ先生、このごろ紡績會社の中へでも行きやァ、ごろ〳〵腐ッて有り餘るほど薄がッて居まさァね、價にす

りやァ綿ッ屑よりも安いンですよ、はゝゝゝ」

熊さン思はず勢ひに乗ッて饒舌り立てしが、その聲を聞いてか本人の瀬田とよ子、ぬッと入り來る體に驚いて俄の大聲、

「おい嚊ァ、來てくれ大變だい」

壁一重を隔てゝ耳を欹てし女房お菊、嚊ァ來てくれ大變だと叫ぶ聲に、思はず走せ込めば、眼鏡越に腕を組んで聊か不平の顏色を現はせし星影先生、無言のまゝ廂髪を立てゝ口惜し氣の脣端を嚙み占めながら悲憤の面を赤めし瀬田とよ子、中間に熊さン進退これ谷りし啞の如く、今更ら最初の勇氣も無く、俄に凹垂れし體を見るや否、いよいよ堪らぬ女房こゝ一期の働きなり、

「ほンとに仕様がないねエ、良人は、宜い年をからげてさ、これで今年は四十二の分別盛りなンですよ、小兒ぢやァあるまいし、前後の思慮もなく調子に乗ッて、べらべ

らと、これが良人さン、平生お心易い間だから宜いやうなもンの、もし氣の小さい意地曲の惡い、妙に角張ッた七面倒な餘所の人樣なら全體、どうするンですよ、それでも良人さン、無事で濟むと思ッてるの、相手次第で大變な騷動になるンですよ、絲目の切れた奴凧とは良人さンのこッた、ふわ〳〵的もない風に乗ッてさ、そのくせ落ちりやァ此通りで、南瓜畑へ引ッ搦ンだやうな始末、急に手の着けやうが無いぢやァありませンか、あとは妾が何とか御挨拶するからね、早く歸ッて掃除でもしなさい、困ッた良人だよ」

嚊ァに叱り飛ばされて熊さン唯々諾々、ぐうの音もなく遁げ出せば、女房いよ〳〵一騎踏み止まッて後殿の武者振、

「先生、まァ濟みませン事で、いえ御承知の先生あゝいふ良人ですからね、何、氣にも腹にも、どう斯うといふ思慮があッて毒を吐くほどの性根ある男では御坐いませ

ンの、たゞ貴君、夢中になると事の見境も分らなくなッて、ほゝゝゝ實は先生、勝手な事を申すやうですが、やはり先生、思ひ過ぎて、つい、うか〳〵辷り出すンで御坐いますよ」

「なッに平生から、性質を知ッてるから僕は、意にも止めないが、あまり瀬田さんに對して氣の毒だッたよ」

「眞實、申譯の無いこッて御坐いますよねエ貴孃、どうか、お腹も立ちませうが何分今いふ通り、圖に乘ると調子が狂ッて、始末に終へない前途闇黑の良人ですから、ほゝゝゝお爲を思へば思ふやうに、優しく、そッと事の分るやうに申せば宜いンですが、つまり實はね、貴孃が近ごろ先生の方へ、急に近しくなさるのを長屋中で何だか妙に變な勘違ひをして、いろンな影口を聞く樣子ですからね、雙方の御爲にならないと考へたンでせうが、たゞ考へただけで、その考へた親切も何も貴孃、めちや

めちやになッて仕舞ッてさ　あれですよ、ほゝゝゝ鬼でも摑みさうに喚きながら、貴孃の顏を見ると、すぐ堪らなくなッて、嚊ァ來てくれ大變だと呼ぶやうな良人ですもの、ほゝゝゝまるで貴孃、お話になりませンよ」

「いえ妾だッて、先生さへ、しかし、あンまりでした事よ、妾、うまれて始めてなの、あれほど遺憾なく侮辱を受けましたのは」

「おや、先生さへ御立腹なけりやァ貴孃も、まァ捌けて在らッしやる事、どうしても當節がらの方ァ、萬事お早いから、結構で御坐いますよ、それに長屋の人達が貴孃、知りもしないで、馬鹿々々しい事を申すンですよ、貴孃が先生に何だとか斯うだとか、人の疝氣を頭痛に病ンでね、ほゝゝゝですから貴孃、御用心なさらないと飛ンだ御迷惑になりますよ、根が揃ッて沒理家ばかりですから、ほゝゝゝ」

嚊ァに叱り飛ばされて遁げ出せし熊公、自己が塒へ駈け込むかと思へば、そのまゝ過ぎて八卦屋の幸運齋へ飛び込みぬ、

「やァ熊さン、どうしたンだ」

「しッ、靜にしろい、嚊ァに今、あとを任して遁げ出したンだ」

「何か間違ひでもあッてかね」

「なァに實ァ、このごろ向側の廂髪がね、ろくでもねエ洒ッ面ァ廣げて、いやに頻りと先生の方へ這ひ込むから、嚙ンで吐き出すやうにコキ卸してやッたンだ」

「そいつァ近頃の出來だ、大體あの廂髪、何だか妙に蟲が好かない女さ、ひよこ〳〵動くたンびに、どうも他事とは見て居れないからね、第一あゝいふ女が居ッちァ、この長屋の不吉だよ、何とかして退散させたいもンだ」

「實際だ、ところで此方は夢中に饒舌ッてるから、知らねエよ、あれを考へても性質

の善くねエ女だ、いつの間にか來やァがッてね、ぬッと背後に立ッてたのを、はゝはゝゝなァに一方が平生から乃公の感心してる先生の面前で無きやァ、横ッ面の一撃も喰はして飛び出すンだが、偖さうも八卦屋さンいかねエ場合だからね、はゝはゝゝ仕方なしに嚊ァを呼ンで、後始末を任せて來たが、今が地平均の眞ッ最中だ」

「はゝゝゝ惜しい事したね熊さン、どうせ後で地平均をするなら、鼻ッ柱でも蹴上げて遣りやァ宜かッたに」

「何、また其うちに時機があらァね、このまゝぢやァ濟まさねエ覺悟だ」

「どうだね熊さン、また時機は時機で、今これから引ッ返して出直しちやァ、仲裁するやうな顔で飛び込ンで、脚を掬ふぐらゐの藝は手傳ッても宜いぜ、實は手傳ひたいよ、はゝゝゝ」

折しも山の神、はや既に一件を平らげて歸れば、良人の姿は見えず壁越の聲、さては

と忽ち八卦屋へ吐鳴り込みぬ、

「良人さん、どうしたもンだね、自分の家は一軒手前だよ、こゝは三軒目の他人様だよ、さういふ暢氣だから、あンな失策をやるンだよ、馬鹿々々しい、誰が廂髪に謝るやうな事をしてくれと頼みましたのさ、そッと先生に氣を付けてあげろと言ッたンぢやァないかね、第一また當家の他人様、この八卦よい屋め引ッ返して出直せの、いや手傳ッてやるのと、よくも御親切に妾の亭主を唆して下さるこッた、さうでなくッても世話のかゝる良人なンだからね」

「いや細君、さういふ理由ぢやァ、決して、そンな考案は」

「ないで濟むと思ッてるの、しかし現在その口で今、言ッた事は確實だらう、妾の亭主は貸せないから、汝さン單獨で往ッて脚を掬ふなり顏を引ッ搔くなり、他の手傳ひせずとも自分で本藝を遣ッてくるが宜い、朝鮮髯と廂髪の取組は觀物だよ、さア

良人さン、早く自家へ歸ッて下さい、これから妾また當家の後始末をするからね」

この一月ばかりは幸ひに米の飯を食へど、それまでは燒芋の薩と麵麭屑を買ひに出る外、冬籠りの蟹に等しく、穴の奥に手足を縮めて泡を吹きながら、容易に浮世へ這ひ出ぬ星影先生も、いつしか例の瀨田とよ子に動かされて、中有に迷ひし人魂の如く、夕暮の宵闇に音もなく、ふわ〳〵として八軒長屋を立出でぬ、

流石に何とやら熊公夫婦の手前、かつは長屋中の目を忍んで、そッと立出でし風俗は數年來の日に曝されしよりも鼠に弄ばれしスコッチの鳥打帽を眉深に戴いて、はや十月の下旬、目にも見ゆる秋風の木葉の散り來る空を綿ネルの單衣一枚、ふしぎに肩屋の鐵砲笊へも捻ぢ込まれざりし襤褸絹紬の兵兒帶、いはゆる上汐の吹き寄せ下駄に脚下の力なく、忽然として俄に動き出し、飄然として輕く歩み出し、颯然として進み、

風然として左右を顧みつゝ、颺々然として吾妻橋を渡りぬ、
この星影先生、故郷の空にありといふ田地一反の外、天下そも〳〵いづこに鐚一文を求むべき、さるを何の苦もなく首肯いて、よろしい僕が引受けたと瀬田とよ子のために同情を寄せし三月の義侠物、たゞ目的は文雅堂にあり、
耳目に觸るゝもの皆これ卑しむべき俗界の物質的といへど、ひよこ〳〵歩くよりは電車の輕便に如かず、詩人また時に其輕便を空しく看過すること能はねば、淺草の雷門前より乗り込むや否、ことし二十九の男が貴君お危う御坐いますと手を取られ、老人か小兒の如く車掌に特別の注意を與へられながら、やう〳〵痩せたる腕を伸ばしつゝ帶皮に吊り下りし體を、三十前後の女が見るに見兼ねて、こゝへお掛けなさいと座を立ちし親切、いよ〳〵病人待遇なり、
神田小川町の角を引廻せし文雅堂、はや其日の業務一切を閉め切りて、店員いづれも

電燈の下に寄り集りながら、餘念なき雜談の店頭へ不意に現はれし星影先生、
「おい、主人は居るかね」
新參の小僧、それへ飛び出しぬ、
「どなた樣で」
先生、大に不平の顏色、
「主人は居るかといふンだ」
小僧ます〳〵眉を顰めぬ、
「主人は居りますが、どなた樣で」
先生、ぐッと癇に觸りし聲、
「わからない奴だな、汝では不可ない、誰か外の店員を」
じろりと見渡す中に幸ひ例の文士催促係、や、君と叫べば、はッと驚いて其まゝ奥へ

遁げ込みぬ、

「旦那、大變です」

「どうした、何だい」

「來ましたぜ、本所の化物が、のこ〳〵遣ッて來ましたぜ、星影先生ですよ」

「馬鹿、何故うまく追ひ歸さないンだ、今夕飯を喰ッたばかりぢやァないか、まだ胸にあッて消化もしないに、うか〳〵逢へるかい、思慮のない奴だ、あゝいふ先生方にはな、よほど身體の調子が宜い時に逢はないと、衞生上に頗る恐ろしい害のあるもンだよ、たゞ嘔吐を催すのみで濟むかい」

「だッて小僧が、在らッしやると言ッて仕舞ッたンですから」

「ぢやァ仕方がない、暫時、汝、店頭で何とか防いで居ろ、そのうちには喰ッた物が自然と落着くから、しかし怒らしちやァ面倒で蒼蠅いぞ、なるべく丁寧に茶でも出し

てね」

そも〳〵文雅堂の文士催促係として、いかなる怪物にも驚かぬ筈ながら、この星影先生のみには後も見返らず遁げ出したる男、まして今、不意に押し寄せられたる狼狽の極、その顏を見るや否、無言のまに飛び込みしが、うか〳〵食後に逢へる先生か夕飯が胃の腑に落着くまで防いで居れとの主命に、已むを得ず度胸を据ゑて店頭へ舞ひ戻りぬ、

「や、これは先生、よく入らッしやいまして、只今また小僧めが、はゝゝゝ先生の御顏を存じないもンですから、とンだ失禮を」

星影先生、始めて不平の解けし顏色、されど店頭に腰もかけず、立ッたるまゝなり、

「主人は居るンだらうな」

「はい、居りますが實は今朝より少々不快で、しかし外ならン先生が、わざ〳〵お越

し下さいましたこッてすから、是非お逢ひ申すと、まづ先生、どうか暫時これで、おい小僧お茶を持ッて來ンか、お座蒲團も」

やう〳〵腰うち掛けし先生、わざと言葉を轉じて今更ら往來を見遣りぬ、

「この邊は賑はしいね、いろンな人間が通るよ、だが皆これ蠢々として無意識の動物ばかりだ、何のために首を前へ突き出して間斷なく兩脚を運ぶか、さらに作用の要點が知れないよ」

「なるほど、先生のやうな高尚な方から見ると、ぞろ〳〵動いて歩く、この往來の人間が哀れに呵しいもンで御坐いませうな」

「蛆蟲も動くからね」

「へえ、いかさま、蛆蟲も動きますな、うよ〳〵と」

「時に近來、少しは讀むに足る書物が出來るかい」

「いえ、營業上、致方は御坐いませンが、とても先生の前で、御覽に入れるやうな著述は出來ませンよ、たゞもう俗受一方の駄作ばかりで、おい〳〵誰だ目錄を出しかけるなァ、失禮な奴だ、餘計な事するない馬鹿ッ」

「困ッたもンだな、何故、さう恥を知らざる賣文の徒ばかり多いンだらう、實に慨歎の至極だ、しかし其うちには僕の作物が出るからね」

「有難う御坐います、つまり文雅堂の名譽になりますこッて、時に先生、今日、わざわざ何の御用で」

「兎も角、主人に逢ッた上、少々、談話をしたい事があッてさ」

「どういふ御用か存じませンが、お話の工合に依りましては、私が一應、伺ひました上で、なァに先生、殊更ら主人でなくとも、却ッて御都合よく取計へる儀も御坐いますからな、内々承り置きまして」

「さうだな、汝に話しても宜いよ、實は文雅堂のためになる理由で、例の著作物ね、百四五十ページといふ約束だらう、ところが僕が更に奮勵一番、尠くとも二百ページ以上にするからね、それに付いての相談だ」

「二百ページ以上、尠くとも二百ページ以上で御坐いますか、へエ、すると先生その御脱稿は、先日、伺ひました節の御言葉に依ッて六年以上になりますな」

「まづ八九年は、かゝるだらうよ」

兎も角も店頭にて唐突の鋭鋒を防がせつゝ、その間に食後の腹加減を確と整へて文雅堂の主人、やう〳〵應接の一室に星影先生を迎へ入れぬ。

「こりやァ先生、どうなすッたので、お珍らしいぢや御坐いませンか、わざ〳〵貴君が今ごろ、かういふ雑踏の俗地へ入らッしやるとは」

「はゝゝゝいや俗は寧ろ僕の居るところの方が俗だがね、偖その俗が天眞爛漫の調を

帶びて、此邊の虚榮を追ひ廻る風塵中の俗とは俗の質が違ッてるから、どうか斯うか住ンで居れるのさ、はゝゝゝ」

「なるほど、さういふ點も御坐いませうな、流石に先生の御住居だ、どうしても見るところが違ッてますよ、はゝゝ時に先生、店の者が只今、ちよいと伺ひました工合では、例の御著作が百五十ページ以上になるさうで御坐いますな」

「さうだよ、實は僕もね、最初の間は持重の自衛策上、何だか今こゝで世に出すのが面白くないのみでなく、惜しいやうな氣もしたがね、よく考へて見ると五十歩百歩だ、ついては更に勇を鼓して、大に筆を執ッて、つまり他日は他日、まづ今日は今日の僕として遺憾なきだけの大作を出さうといふ決心になッたよ、從うてページ數も增すからね、一は文雅堂の好意に酬ゆるため、一は讀者の渴望を滿たしてやるため、また自己が興に乘じた結果だ」

「はゝァ、さういふ理由ですか、なるほど、分りました、しかし先生、讀者の渴望を滿たしてやるのは兎も角、わざ〳〵文雅堂のために約束以上お酬い下さらなくッても結構で御坐いますよ、先日また店員が出ました節、御脫稿は六年といふ事も承知いたして居りますから、なァに實は六年でも十年でも先生の思召次第、つまり先生だけは他の著者と違ッて特別の御待遇を申し上げて居るンですから、何卒お心まかせに、ゆる〳〵とね」

「や、さう出られると猶更僕の方で、ます〳〵その好意に報いざるを得ない理由だ、是非、あらためて二百ページ以上にするからね」

「ぢやァ宜しう御坐います、折角の御奮發ですから、三百ページでも五百ページでも先生の出來るだけを願ひませう、また時日の點も先生の御脫稿になるまで長ければ長いだけ前途を樂しンで、待ッて居りませう」

「はゝゝゝ人間は感情的だ、そこまでの雅量を以て僕に對せば僕また文雅堂に對して長く待たして置くに忍びないからね、騎虎の勢ひで、猛然として筆を執らう、一瀉千里、まづ一年に一册づつを與へよう」

「先生、そりやァ酷い、手前は先生の生涯に一册の覺悟ですよ、苟くも書肆として先生の名篇一部を賜はらば、文雅堂それで名譽の極點ですよ、もとより先生の御著作なンかァ賤しい算盤珠の外で、實は本屋の罪亡ぼしに出版するンですからね」

これまで無遠慮の敬遠策を施されても、蟹の目の上ばかりに飛び出して猿の手の自己が尻に及ばぬ星影先生、いよ〳〵滿面に微笑を浮べながら得意の體なり、

「殆ど人爲でない、正に文雅堂が向上發展すべき自然の時節到來だ、その名譽の極點を幾度も與へるよ」

いかにも人爲的の業でなく、これは文雅堂の天災なり、

文雅堂の主人が巧みに施せし敬遠策も、人間の凡慮を以て當るべからざる大詩人には何の效もなく、ます〳〵星影先生の熱度を高めて、例の調子を鼻頭に振り廻されたる結果、苦し紛れに百五十ページ以上の約束すれば、この詩人また自己の都合上には案外の俗氣紛々、兎も角それに對して十圓ばかり出せとの事、十圓には替へられぬ時の災難と諦めて、その十圓を差出せば、先生いよ〳〵得意滿面の體、なるべく奮勵して筆を執るよと言ひ殘しながら飄然として立去りぬ、

店員いづれも呆れて驚いて無言のまゝ寧ろ感歎の舌を卷きし中に、例の文士催促係のみ、しきりに不平を鳴らし始めぬ、

「困りますね旦那、あゝいふ事をなすッちやァ、相手が恥辱も何も知らない彼ですものの、うるさく癖になッて、この後が堪りませンよ、きッと旦那、これに味を占めて

絶えずノコ〳〵遣ッて來ますぜ、いえ何、十圓の金は宜う御坐いますが、第一、もし聞えると外の先生方に對して濟みませンよ、いくら版を重ねても最初の原稿料以外、平に御免を蒙ッてるンですからな」

「わかッてるさ、いはれなくッても充分わかッてるがね、乃公だッて身體が大事だよ、あゝいふ先生に眞正面から一時間も熱を吹かれて見ろ、それこそ十圓の藥價ぢやァ濟まないぜ」

「何故また好奇心に旦那、氣の毒な感情をして謝ッてる先生方もある中で、わざ〳〵あンな厄病神を探し出して來なすッたンですよ、とッ付かれた上は今更、仕方ありませンが」

「さァ、そこだよ、店の小僧が業平町で逢ッたといふ風體を聞いた其日が汝、實は乃公の父親の命日に當ッたからね、こりやァ捨てゝ置けない何かの因緣だと思ッて、

わざ〳〵探し出したのさ、たゞ二十五圓、くれてやれば宜かッたのを、あれでも汝、以前、をり〳〵自家の雜誌へ投書した事のある人間だからね、つい原稿料と辷ッたのが災難のかゝり始めで、はゝゝゝとンだ因緣に搦みつかれたよ、しかし今日ぎりだ、斷乎として今後は取合はないからね、無論、今までの金は店の方からで無く乃公の小遣から出すよ」

「さういふ御孝行から出たと仰しやれば何も旦那、奉公人の私どもへ御遠慮には及びませンよ、店の方から御出金になッても宜う御坐いますが、あの勢ひでは旦那、此方は出版の有無に關せず生涯に一册だけ佛へ對して買ッてやる心算でも、相手は委細かまはず年々に一册づつ持ち込ンで來ますぜ、加之も讀者の渴望を滿たしてやるの、文雅堂の好意に酬ッてやるのと、吐す事が癪に觸ッて堪りませンよ、大體が精神に異狀のある半狂亂と思ッて居ても、さうは彼奴の御保護ばかり出來ませンから

な、いッそ二三日のうち逆寄せに押掛けて、今後、無關係の宣告でもしてやりませうか」

「や、待てよ、うか〳〵唐突に汝、そンな事をしちやァ大變だ、あの上に氣でも違ッて來ると猶更面倒だよ、そのうち何かの機會を見て、うまく退治するからね」

「ぢやァ旦那、どンな事があッても今後お逢ひなすッちやァ、いけませンよ、店は一切、團結して、思ひきッて、手嚴しく當りますからね」

ペストかコレラに取付かれし如く恐れて、泣く〳〵文雅堂の主人が差出せし十圓を、この星影先生は我に對する感涙と心得て、物質的も時に取ッての便宜上、また神田の小川町より淺草の雷門まで電車に運ばれつゝ、飄然として吾妻橋を渡る頃は、夜の十時を過ぎて、こゝ三日あまりに圓ならんとする秋の月、いつしか斜めに向島の奥よ

り銀盤を捧ぐるが如し、

星影先生、いよ〳〵詩的に入る心地、暫し我を忘れて橋の中央に立傍りながら、月と水とに對うて何をか語るに似たる折しも、そッと背後より立寄る人影、

「先生、今お歸りですの」

振り返れば例の瀬田とよ子、何とやら風情ありげに立ちぬ、

「や、瀬田さん、どうして今ごろ、運動ですか」

「あら先生、酷いこと、妾、運動では無くッてよ」

「どッかへ、用にでも出掛けたンですかね、もう十時でせう」

「實はね、お待ち申して居ましたの、先生の、お歸りを、こゝで」

「何、僕の歸るのを」

「きのふの御言葉で、明日の夜、神田の或書肆へと仰しやッたでせう、だから妾、こ

こでお待ち申して居ましたの、妾を知られない人のため、いくら侮辱されても、どンな障碍を蒙ッても、それがため同情を失はないと信じて居る先生ですもの、妾、思はず感謝の念に驅られて來ましたのよ」

「はゝゝゝ婦人の通有性ですな、しかし其短所ともいふべきところに寧ろ自然の美德があるンでせう、はゝゝゝなァに鄰屋の車夫も別段、惡意あッて喚いた理由では無いですよ、ありやァ元來あゝいふ露骨的の男でね、つまり自己以上に接した事のない境遇と無教育の罪さ、自分の妻に一喝されて忽ち遁げ出した點が彼の本色ですよ、はゝゝゝ時に瀬田さん、兎も角も貴孃の一時を補ひ得らるゝだけの事は、かりに今夜、ちよいと、ある書肆から持ッて來ましたからね」

「おや、先生、どうしたら妾、宜いンでせう」

「もし、これが貴孃に對して送るものと知れば、その書肆は貴孃に對うて多大の謝辭

を呈するでせう、その書肆に僕が金錢上の命令を與ふれば、與へられるだけ書肆としての名譽と利益とを多く併せ得るの便宜が生ずるンですからね、また僕に取ッては更に何の痛苦も感じない、わづかに半ページの原稿を增せば優に餘りある結果だ、はゝゝゝ」

「だッて先生、その半ページが優に餘りあるほどの先生をして、たとひ一字でも、妾のため、書肆の利益物に、おさせ申すのが遺憾ですワ」

「まア、そンな事は、どうでも宜いとして、今夜の月は一入ですね」

「先生、もし月が妾等を、變に疑ッて、卑しく照らしてくれないものとすれば、妾、この月に乘じて清く快く向島を散歩したう御坐いますよ」

「無論、月は無心の塵外物ですよ、出かけませうか」

人は定まり夜は更けて後、衣香扇影の春は夢と過ぎ去りし向島に、草葉の露の蟲の音

を哀れに聽きながら、靜けき殘んの枯葉越に秋の梢の月を仰いで、氣も心も隅田川の流れに添ひつゝ、ぼッと薄墨の刷毛繪に似たる白髯の森を遠く望み、近く水に浮べる待乳の山を振り返りて、外に影なき才子佳人が何とやら互の胸に思ひありげの風情といへば、なさけの神にも妬まるべき人生一期の情致こゝに極まれど、實は鐘が淵の紡績會社より歸り來る工女にも羨まれぬ半狂氣の新體詩人と腐り果てし鰕茶の墮落式部が搦み合うての散歩は只これ十圓紙幣一枚の業なり、

「凡そ世の中に月ほど詩的を帶びたものはありませンよ、實に月は人間の生命に缺くべからざる露の結晶體だ、わけて秋の月は清く高く冴えて、照らすところ一點の俗臭も許さない、浮世の利害得失も窮達消長も無いですよ、ねエ瀨田さン、僕のやうな感情に深いものは自然に同化せらるゝの極、善惡の外に逸出するから、或は却ッて人生普通の軌道を踏み外すかも知れない、はゝゝゝゝ堪らないね、この月に對し

ては」

「あら、先生、貴君ばかりでない事よ、妾だッて、たゞ無心に肉體ばかり照らされて
は居ませンの、何だか妙に一種の、口で言はれない一種の我を忘れたやうな感が起
ッて來て、もう世の中の名譽も不名譽も利害も希望も無くなりますワ、ねエ先生、
どうしたら妾、この月に對して遣憾なく、妾の氣が濟むンでせう」

「こりやァ不意擊に困ッた問題だ、聊か答案に苦みますね、はゝゝゝ」

「妾、もし妾が先生なら、少しも困りませンよ」

「困らない、ぢやァ假に僕と地位を替へて見て、どう困らないンです」

「困りませンの、困らないぢァありませンか」

「その困らないといふ、困らない理由を聞きたいもンだ」

いやですよ先生、妾は先生の地位として困ら くッても、先生は妾の地位になッて

困る方だもの、困らずに居れない方ですもの、ほゝゝゝ」

「いよ〳〵分らない、貴孃が假に僕として困らない自信があるンでせう、すれば僕が
自信のある貴孃になッて見て、猶更ら困らない筈ですがね」

「筈でも何でも先生は事實に於て確實に困る方、妾は困らない人、ほゝゝゝおや先生
牛の御前まで來ましたよ、土提の上もですが、あの境内へ這入ッて見たいことね、
かういふ月夜の薄闇い木影は、また却ッて別種の趣味があるもンですよ、ねエ先生」

「や、面白い、その邊から土堤を降りませう、しかし瀨田さン、草に露を持ッて脚下
が辷りさうだ、もし怪我でもすると不可ないよ」

「あら先生、妾、怪我をしては貴君いけないの」

うす闇き樹下闇に潛める魔の手に差招かれて、男も女も平生の口とは正反對の動物、
ずる〳〵と其まゝ音もなく引摺り込まれぬ、

神田の文雅堂にて十圓紙幣一枚を得たる星影先生は、幸ひ電車内の掏摸に取られねど、瀬田とよ子のため吾妻橋の上に網を張られ其まゝ向島の月に誘ひ出されつゝ、果は牛の御前の境内、人なき樹下闇に吸はるゝ如く引摺り込まれて、ことし二十九の今夜ここに始めての大詩人、もはや神聖の戀も理想の美もなく、議論も絲瓜もない骨ぬき鰌となりぬ、

業平町へ歸り來りしは其夜の十二時も過ぎし頃、月いよ〳〵空に冴えて、地に曳く影の流石に伴ひ難く、わざと三四間を前後に隔てながら、瀬田とよ子まづ長屋の入口に近づくや否、今ごろ何のためか内より不意の出合頭は南無三寶、相手も相手に依りけり例のお虎婆ア、

「誰だい、唐突に、おや、隣屋の廂髪さンだね、おや〳〵今時分、なま若い身空で何

處を彷徨いてたの、どこから歸ッて來なすッたの、餘計なお世話だが氣になるよ、老婆といふものはね」

「ほゝゝゝかういふ月ですからね、うか〳〵向島邊を散歩して、つい遲くなりましたの」

「一人でかね、ぢやァ無からう、何だか變に怪しいよ、もし月が善くッて出るなら病人でもない友達が淋しく家に殘ッてるぢやァ無いかね、お不在に物を取られる御身分とも思へずさ、同伴に連立ッて出さうなもンだ、はゝゝゝ」

「病人でなくッても、氣分が惡いからですよ、夜露は衛生に害があるもンですからね、わざと殘して置きましたの」

「はゝァ、さやうか、それは失禮千萬、とンだ見當違ひな事を申し上げましたね、今こゝで爭ッても仕方が無い、まァ靜に這入ッて寢なさい、明日の朝また聞きたい事

があるからね」

「どういふ理由ですか、まるで妾、繼母の迫害を受けるやうですワ」

「繼母、まゝ母の事かね、ふざけなさンな、出來は二の町でも娘と名の付く娘を持てばね、そンな勝手な眞似をさして置かないよ、夙の昔、女郎にでも叩き賣ッて金にするさ」

瀨田とよ子、むッとせしが、現在この身に後ろ闇き今夜、加之も夜更けて寢耳に近き棟割長屋の入口、まして四五間の彼方には事實の相手ありて、あとに心は殘れど爭ふ勢ひもなく、たゞ冷かなる笑ひ聲に紛らしつゝ、遁げ込めば、お虎婆ァ舌鼓もろとも振り返りながら、また月に對うての獨言、この長屋を自己が手に握れる關守の如し、

「さァ、これで長屋中に足らない奴は、あと一疋だ」

きくや否、長屋の裏角に板張付の如く息を忍ばせし星影先生、はッと驚いて方角も定

めず遁げ出せしが、あはれや今夜、この一夜を露に打たれて、綿ネル單衣に肌寒き曉まで、うろ〳〵何處を彷徨ふやら、他人に知らねど、流石に詩人の戀は最初より趣味多し、

せめて二室か三室の家に四五人の住居ならば、さのみ目に立たねど、マッチ箱に似たる九尺一間づつを壁と壁との棟割長屋、寢ても起きても人間の有無は手に取る如く、わけて平生は穴籠りの星影先生、まづ第一に怪しまれぬ、

加之も鄰屋の熊さン夫婦が眉を顰めて私語きし體を、早くも見て取りしは向側のお虎婆、自己が壁一重の鄰屋も案外の閑靜なる體に、そッと差覗けば松坂あさ子たゞ一人このごろ長屋の風聞に上る瀨田とよ子の姿なし、

まして宵の九時前後より十二時ごろまで、ともに打揃うて以上の男女が歸らぬ不思議

さ、占めたと膝を打ちて拔け殘る亂杭の齒に笑を含みながら、長屋の入口に關を据ゑて待てば、果して案に違はず、こそ〳〵と遁げ入りし女の風情、あとの野郎一疋を二時過まで空しく待草臥れしが、いよ〳〵必定それと睨みぬ、

たとひ事實それでなくとも、このまゝでは濟まさぬ婆、夜の明くるや否、のこ〳〵鄰屋へ押掛けぬ、

襲ひ込まれし瀨田とよ子、また打てば響いて斯る事に素早い女、さらぬも近來、ちらちら長屋中に日を付けらるゝ折柄、あの車夫と此お虎婆を前後の敵に受けては叶はじと、例の十圓より一割、その一圓を喰はすべき覺悟、

「あら、お早いことね、妾、やう〳〵今、起きましてよ」

「そりやァ、さうでせうとも、さぞお勞れだからね、はゝゝゝ」

「まッたく、勞れましたの、あまり月が冴えて居て、うか〳〵前夜、あれまで夜露に

打たれたンですもの、ほゝゝゝしかし今日は久しぶりで故郷から、少しですが爲替の着く日ですから、何か滋養物でも喫べて、身體を休めませう、ねェあさ子さン、遲くも今日の正午ごろには着くでせうね」

「おや、爲替、爲替といへば、お金が來るンですかね、今日の正午ごろに、おや〳〵まァ結構なこッた、この長屋中で爲替の來るやうな人間は、とても外にありませンよ、おうら山吹、全體、どれほど來るンですい」

「實はね、これから毎月、尠くとも十圓づつ來るやうになりましたの、きッと十圓づつは妾、取る覺悟ですの、取らなくッては、つまりませンもの、ほゝゝゝゝ失禮ですが、もし御入用なら、少々は御融通しても宜いンですよ」

「おや、おや、おや〳〵、そりやァ豪氣だ、いえ何、かうしてね、同じ棟割長屋でも壁一重に鄰り合ッてるのは格別また何かの深い因緣ですよ、はゝゝゝもし外の奴が

彼是、いやに妙な事でも吐した時はね、この婆ァが引受けて、たゞ置くこッちやァない、安心なさいよ、どうも他の疝氣を頭痛に病ンで、餘計な口を出す奴が多くッてね、はゝゝゝまァこの長屋で根が上品に出來て居て、萬事おとなしいのは當家の御二女と、あの向側の先生樣ばかりだ、へゝゝゝ」

人間こゝに至れば一身兩樣の使ひ分、その作用の捕捉すべからざる轉化變妙、魔術師の奇藝よりも面白し、

お虎婆のため長屋の入口に俄の關を立てられ、さァこれで後の野郎一疋だと聞くや否、はッと驚いて其まゝ遁け出せし星影先生、まして久しく燒芋の蓄と麵麭屑に飢餓を凌いで、やう〳〵近來こゝに米の飯を喰ひ始めし身體、方角も定めず秋の夜長の終夜ら露に打たれながら、うろ〳〵狼狽き廻りし曉方の哀れさ、しきりに水洟の垂るゝは綿

ネル一枚の肌寒に風を引込んで、さらぬも前夜の骨ぬき鰌、今朝は一入いよ〳〵弱り果てゝ、ぼんやりと歸り來りぬ、

されど先生、いざ長屋の入口となれば茫然ともせず、急に氣を取直して斥候の敵狀を窺ふ勢ひ、幸ひ左右の兩側に人の影なき機を見澄ますや否、ちよろ〳〵と泥溝鼠の如く這ひ込んで、そッと自己が巢に藻潛り込みつゝ、じッと息を殺せしまゝ暫し身動きもせざる體、平生の無趣味なる詩的よりも頗る案外の滑稽を帶びたり、

流石に疚しく恥づかしき鄰屋の熊さン、もはや稼ぎに出でし樣子、何とやら恐ろしき向側のお處婆ァ、また不思議に閑靜なる樣子を見て、先生、まづ一時の安堵せし心地やう〳〵落着けば、前夜の月に牛の御前の樹下闇、目に浮びて忘れ難く皮肉を通して骨に刻まれたるが如し、

加之も目に浮びて心に忘れ難く皮肉を通して骨に刻まれし其本尊は、同じ長屋に廂と

廂と相接して六尺の通路、人日さへなくば居ながら互に語り合ふべき間、前夜あの後いかにせしか、さぞや寢もやらで枕を欹てつゝ我跫音を待ち明せし今朝、そッと歸り來りしを知るや知らずやと、おもはず戸口より差覗けば、彼方も戸口より情に得堪へぬ半面を現はしながら、にこりと笑ひし笑顔は毒刃の一閃、されどこの詩人に取ッては自己たゞ一人に漏れ來る天國の光輝よりも清く尊く有難し、

をりしも熊さンの女房、わざと顔も出さず、たゞ壁越の聲、

「おや、先生、お歸りですね、前夜は、どこで御一泊なすッたの、良人が大變に心配して居りましたよ」

「はゝゝゝそれは氣の毒だッた、しかし實はね、神田の書肆へ用があッて、ところが久しぶりだから、無理に引止められてさ、困ッたよ、好まない酒を強ひられて、殆ど終夜の苦痛だ、今朝まだ頭が割れるやうだ」

「あら、さうですの、さうとは知らずに先生、どンなに案じましたか、めッたに御出なさらない貴君が、ふいと急に、默ッて、何とも仰しやらないもンですからね、ほゝゝゝ眞實、本屋さンへ御用だッたンですか」

「今日の僕として、外に寢るところがあるもンかね、はゝゝゝ」

「だが先生、何だか此ごろは妙に世間が物騷だといふこッてすからね、うか〳〵夜、お歩きなすッちやァいけませンよ、今までと違ッて猶更大切の御身體ですもの、もし御用があれば、お手紙を戴いて良人が貴君、どこへでも飛ンで行きますよ、ねエ先生、これからァ、さうなさいよ、また御自身で無きやァ叶はない時は幸ひ、良人が俥でね」

「や、有難う、いつもながら、實に感謝するよ」

感謝は同じ感謝なれど、さて今日よりの星影先生、その感謝の程度に於て今までとは

聊か自然の相違ある筈なり、

「瀬田さん、ほンとに妾、貴孃には驚きますね、恐れ入りましたよ、どうして、さう大膽に、機敏になれるンでせう、つまり天性ですね」

「あさ子さン酷い事、天性は酷いことよ、いくら妾だッて、これを天性に見られては默ッて居れませンよ、事實、他に方法の盡きた苦痛の結果で、いはゞ境遇の迫害を免るゝ一時の便宜上で、餘儀なく已むを得ないための犧牲になッたンですもの」

「あら、其事が天性と言ッたのでは無いに瀬田さん、たゞ其事に付いての機敏に妾、驚いて感心したンですよ、ほゝゝゝ相手が尋常の人でないから、猶更」

「たゞの人でないから猶更、與し易いンですよ、もし世間普通の常識を備へた人なら、とても妾が、どうして、かう容易に成功、ほゝゝゝ成功は妙ですね。何だか變で

ね、ほゝゝゝつまり詩的とか理想とか、到底この人間界に出來得ない不可能を目的としてる人ですから、案外、人間界の實際には迂くッて幼稚ですの、ね、しかし、あれでも詩人の端くれに相違なくッてよ、現在、神田に原稿料を出す出版書肆があるンですもの」

「ふしぎですね、一部に付いて幾何ほどの原稿料でせう」

「まだ分りませンがね、現に前夜の十圓も、さのみ面倒なく出來たらしいですのよ、無論、妾に對する本人の言葉ですから、悉く信じられませンが、その十分一に聞いても、どうか斯うか筆さへ執れば、まさか衣食に窮するやうな事は、無いらしく思はれますよ、だから妾、今のうち執れるだけの筆を執らして見る心算ですの、ほゝほゝゝゝ」

「瀬田さン、あまり貴孃のため正直に、一所懸命に筆を執り過ぎて、その執り工合が

萬一、もし貴孃の愛を或一方から奪うて轉化せしむる動機になッては大變ですよ、いくら貴方が一時の方便に供する心算でも、策謀は竟に眞實を制し得ませンからね、また貴孃だッて世俗の所謂、嘘から出た實といふ事に傾かないとは妾、今は兎も角長くは保證しかねますよ、かりにも詩人といへば高尚な業で、第一あの人だッて、こゝといふ特殊の缺點を見出すほどの醜男では無いンですもの、瀨田さン、怒ッては嫌よ、妾だから、かう露骨に言ふンですの、ほゝゝゝいくら忘れなくッても獄裡の人は、ある期限まで奈何せン其まゝ獄裡の人で、獄裡以外の他に直接の新勢力ありとせば、瀨田さン貴孃に限らず感情の動物ですからね」

「口惜しい事、あさ子さンのために妾、そこまで薄志弱行に見られたンですか、これが天性だの、獄裡以外の新勢力に傾く恐れがあるのと」

「いえ瀨田さン、だから言ッてるぢやありませンか、もし萬一、そンな事になれば大

變だと」

「憚りさま、この瀨田とよ子は一時の已むを得ない便宜上、形ある肉體を傾けても、形のない精神的の愛は動きませンのよ、夜毎の萬人に接する卑しい娼妓でも、心の愛を注ぐのは生涯に只一人ですとさ、妾、あさ子さン、その醜業婦以下ですか」

どこで仕込まれしか蓄音器と一般、相應に鳴るだけの聲は鳴り出す女なり、

世間は目に見えぬうち、はや風の音に驚いて、朝夕の肌心地に秋は知れど、この八軒長屋は一年中に夏と冬との二期あるのみ、春は其まゝ夏の部に引摺り込み秋は冬の部に押し込んで、そろ〳〵筑波颪の水鼻を誘ひ來る頃に單衣より一足飛びの破布子、十一月の聲に攻め寄せらるゝや否、いざや事となりけり俄の大狼狽、頻りに質屋の庫を望んで怨めし氣に騷ぎ始めぬ、

わけて例の幸運齋、自己は他人の運命を手に取る如く饒舌り立てながら、いづこも同じ順を追うて年々相違なく定まりし月日の來るに氣が付かず、今更不意の闇討を喰ひし如く驚いて、さァ大變だ、かうしては居られぬと狼狽へ出しつゝ、此頃は淺草に殆ど徹夜の一所懸命、

流石の淺草も冬の初期は人影いつしか早く散り失せて、はや十二時に近づけば仲店の敷石を下駄の音、からころと數ふるばかりの淋しさ、まして山門の傍らなる濡佛の邊は、うろ〳〵迷ひ犬も這ひ寄らぬ闇の中を、神易の弓張提灯に算木と筮竹を置き竝べて、ぼしや〳〵の朝鮮髯こゝに悄然たる折しも、中折帽の鍔を深く悠々と懐手のまゝ歩み來る男あり、

や、鴨一羽、占めたと幸運齋、おもはず威儀を正して俄に饒舌り出せし鼻頭へ、ぬッと立ちぬ、

「骨相、手筋、時の判斷、事の吉凶、一身の運勢、但しは他人に係る一切の利害得失、いづれで御坐いますな」

きくや否、くつ〳〵と笑ふ聲に、むッとして見上ぐれば、や、行方も知らず飛び去りし例の吉川實なり、

「どうだい、八卦よい屋、相變らず不景氣な痩せッ面を傾けてるね、おひ〳〵冬空に向ッて來たぜ、一蓮托生いづれも大騒動だらう、お虎婆アも廂髪も金糞も千三も亡者も車夫も無事かね、可哀さうに浮ばない奴等だ、はゝゝゝ」

幸運齋、占易よりも眼前の風俗を見て取ッて眉を顰めながら、何が悲しいやら呵しいやら半泣きの苦笑ひ、

「吉川さん、ふしぎに羽織も着物も小ざッぱりと時候に叶ッてますな、白縮緬の兵兒帶を卷き付けた工合、兎も角も委細は其方のこッた、まづ此方は先達の四十九錢、

是非とも今こゝで御返濟を願ひませうか」

「はゝゝゝいぢらしい音を吐くわい、しかし四十九錢とは正直だ、そら一圓くれてやるぞ」

「えッ一圓、なるほど、こりやァ一圓紙幣だ、全體まァ吉川さン、どうしたンです、大丈夫ですか、この一圓を此まゝ貰ッて置いても」

「危險と思やァ、遠慮なしに返すが宜いぜ、わざ〳〵念を押して遣りたくも無いからね」

「いや別段、怪しいとも何とも言ッて居ませンよ、たゞ四十九錢が不意の一圓になッて貴君の風俗が急に、その風俗ですからね、加之も取られた覺えがあるンですもの、はゝゝゝゝ」

「けしからン事を吐すよ此奴、さういふ蛆蟲のやうな料簡で居るから、いつまで其ざ

まだ、無い時は鐚一文も無いが摑めば千金の男だぞ、うす汚い朝鮮髯でも剃ッて出直せ」

「や、事と次第に依ッては今、すぐでも髯を剃ッて伺ひますがね目下、いづれですな、御住居は」

「はゝゝゝさう急に伺はれて堪るかい、第一これから御自宅へ歸るンぢやァないンだ、時刻と方角を考へて見ろ、淺草の後に別世界ありだ、情夫は退け過ぎといふ事を知らないか、どりや、そろ〳〵出かけよう、さぞや嘸、我せこが來べき宵なり、さゝがにの、はゝゝゝゝ」

「吉川さン、ちよいと吉川さン、まだ談話がありますよ」

「馬鹿ァ言へ、その一圓で澤山だ」

闇に打ち出せし鐵砲玉の如く、行方も知れず飛び去りし吉川實、幸運齋の身に取ッては兼てより怨恨ある奴なれども、はや諦めし四十九錢が思はぬ不意の一圓となりし今夜、その一圓に忽ち罪も報いも忘れ果てゝ、八卦道具を小脇に抱へしまゝ繩暖簾へ飛び込んで空腹に久しぶりの酒、三四合の醉に陶然として歸り來りぬ、

はや夜の十二時を過ぎて一時に近く、ひッそりとせし長屋の入口より二軒目、火もない眞ッ黑闇に這ひ込んで、そのまゝ丸寢の手枕に身を横へしが、ふしぎや今夜出逢ひし吉川實の空巣、壁一重隣屋の空屋に猫か鼠か、ごそ〳〵といふ物音、

「しッ、畜生」

ばたりと止みしが、まだ暫時の後に、ごそ〳〵といふ物音、壁際に倚り添ひつゝ耳を欹つれば猫とも思へず鼠とも思へず、何とやら人間らしき體に、はッと今更ら首を縮めて驚きぬ、

さては狼狽へし盜賊め、そも〳〵この八軒長屋を何と心得て迷ひ込みしか、怪我さへせずば此奴おもしろし、いざといはゞ第一番に熊公を呼び起す覺悟、そッと自己が塒を脫け出でて跫音を忍ばせながら隣屋の戸口を探れば、果して二三寸、入口の柱際より隙いたり、

朝鮮髯、おもはず中腰に這ひ寄ッて、その二三寸、がたりと閉め切るや否、兩手に戸を押へて俄の大聲、

「盜賊、盜賊ッ」

叫ぶ聲もろとも空屋の内より一所懸命、戸を押し倒して飛び出せしは確に二人、その一人は方角を失うて長屋の奥へ、その一人は首尾よく長屋の外へ遁げ出せし體、押へし戸を抱いたるまゝ反仰に倒れし朝鮮髯、どか〳〵と其上を二人に踏まれて猶更の大聲、今にも絞め殺さるゝが如し、

「助けてくれッ」
聲と物音に寢耳を貫かれし長屋中、いづれも飛び起きて躍り出せしが、さて一點の火もない闇の中の大騒動、
「どこだ〳〵」
「遁すな」
「ぶち伸めせ」
「金庫に用心しろッ」
そのうち手早くマッチを擦り出せしは熊公の女房、豆ランプの光りに立寄れば、戸の下より這ひ出でし朝鮮髯、
「二人だ、どろぼう二人だ、一人は奥へ遁げ込ンだぞ、入口々々、さァ入口を塞いだ入口を」

や、占めたと長屋の入口を塞ぎしは熊さンと鑛糞野郎、やう〳〵起き上りし朝鮮髯は豆ランプを片手に差上げて、千三の石作は心張棒を提げながら、跫音高く地踏鞴を踏んで叫び出しぬ、
「さァ盗賊、この長屋ァ一方口だ、觀念しろ、うぬ唐突に出やァがると生命が無いぞ、出るなら出ると言ッて出ろ」
お虎婆ァも廂髪も火を點して内より立騒げど、流石に詩人の星影先生のみは寂寞として火もなく音もなし、
「おい熊さンの細君、隣屋の先生にも火を點けて貰はないと困るよ、何だか右側の奥が薄闇いから」
外に遁路のない一方口の奥、隈なく探せど盗賊の影なきのみか、火も音もない筈、ふしぎや先生の影もなし、

空屋の戸を押し倒して内より飛び出せしは確に二人、その一人は首尾よく外へ遁げ出せど、その一人は狼狽へて奥へ遁げ込みしに、脱け出る穴も寸隙もない一方口の行き止りに影さへ見えぬのみか、加之も猶更ら不思議は長屋中で俄に一人の失せ物、さりとて屋根傳ひに遁げ伸びし體もなく、わづか六尺の間三四人も立塞いで居ながら頭上を飛び越えられ股間を這ひ脱けらるゝ筈もなければ、星影先生の事は偖置いて、あの朝鮮髯め、久しぶりの酒に夢現の寢恍騒動であるまいかと笑へば、八卦よい屋、眼を丸くして怒り出しぬ、

「人を馬鹿にするッて、程度のあッたもンだ、あまり酷いよ、いくら空腹に久しぶりの酒を注ぎ込ンでも、いくら世間普通より早く耄碌しても、たしかに壁越の物音を聞き澄ました上、わざ〳〵自己が堝を這ひ出して隣屋の戸を兩手に押へても、加之も其戸と同時に押し倒されて、どか〳〵と蹂躙られるほど御丁寧に念の入ッた寢恍けやうがあるもンかね、正に二人だよ、まッ闇でも外と内とへ分れて遁げた跫音が畜生、まだ耳に殘ッてるばかりでない、戸を跳ねて起き上らうとする途端、奥の方へ遁げ込ンだ奴に後足で現在、この頬ッ邊に蹴られたンだからね」

なるほど、きけば夢うつゝの寢恍騒動でもなし、されど縫目も破れぬ袋の底へ遁げ込ンだ奴の居らぬは不思議の至極、それに不思議は右側の奥の一軒目、この騒動中に消えて無くなりし星影先生、夜が明けても歸らず、正午を過ぎても歸らず、そのまゝ夜に入りても竟に歸り來ぬとは是また長屋中の不思議の種となりぬ、

「どうしたンでせうな、他のこッたが不思議ですね」

「さア、をかしいぜ」

「何だが近頃ア、急に續けて米の飯を喰ひ始めた樣子だからね、弱り切ッた蟀蟋へ爪の實を遣ッたと同じ理で、俄に身體へ生氣が付いて、當もなく籠を飛び出したンぢ

やァ無からうか」

「そこだよ、飛び出したにしても、やはり根は蟀蟋と違ッて人間だからね、今日は歸りさうなもンだ」

「わるく考へて、もし空屋から飛び出した二人の一人が、それでさ、慌てゝ外へ遁げたとすりやァ不思議も無いが、あとの一人が奥へ遁げ込ンだとすりやァ不思議だね、また遁げ込ンだ奴が別物とすりやァ、猶更ら不思議だ、この長屋の奥で人間二個が消えて無くなッた勘定だからね」

「いや、消えて無くなッたかも知らないぜ、平生から人間放れをして、ありやァ亡者の部だよ、はゝゝゝゝ」

鑛糞の西川要五郎、千三の石作、朝鮮髯の幸運齋、いづれも事あれかしに、面白半分の奴等、しきりに打ち集りて、とりゞの噂に騒げど、熊さン夫婦、立寄りもせず眉

を顰めて人知れぬ腕を組みぬ、

「嗅ァ、いよ〳〵變だぜ」

「妾もね、實は良人さン、妙に思ひ當る事があるンだよ」

神田小川町の出版書肆、文雅堂の店員、おもはず聲を潜めながら、や、來たぜ〳〵といへば果して例の星影先生、今日は飄然とも得せず、ひよろ〳〵として今にも倒れんばかりに入り來りぬ、

「主人は居るかね」

「お生憎さま、不在で御坐いますよ、居りませンよ」

「居らない、どこへ往ッた、いつごろ歸るね」

「何處とも聞きませンので、また何時ごろといふ事は、とても」

「では、あの、文士連を廻り歩く男、あれは居るかね」
「それも居りません、今日は當店に取ッて大切な先生方を三四軒、お伺ひ申すと言ッて出ましたから、到底、急には歸りますまい」
「困ッたな、主人も彼も居らンでは、外の者に分るまい」
「いや、分ッて居ります、先生の事に付いては懇々、よく申し聞けられた事が御坐いますから、分ッて居りますよ」
「むゝそりやァ感心だ、文雅堂の主人なか〳〵面白いところがあるよ、過日、不意に來て汝達が知らなかッたから、後で懇々、僕の事に付いて何か言はれた事があるンだな、はゝゝゝしかし談話だけ分ッてもね、事が運ばないぢやァ困るから、兎も角も歸るまで待たう」
「おい〳〵誰か來てくれ、一人ぢやァいけないよ、そろ〳〵始まりさうだからよ、い

え何、先生、手前どもの事で、はゝゝゝしかし先生、折角で御坐いますが、お待ち遊ばしても、無效ですよ」
「無效とは、今日中に歸れないといふンかね」
「いえ、手前の主人は旅行の外、歸らない筈は御坐いませンよ、歸る事は先生、きッと歸りますがね、さて歸ッたところで先生、無效で御坐いますよ、どういふ御談話か存じませンが、先生には以後一切、どンな事があッても、いかなる事情があッても、當分お相手にならないと申して居りますから、實は兼て先生へ願ッて居ります新體詩も、お謝絶いたさうかと申して居りますほどの次第で、なァに差上げた原稿料も過日の十圓も無論そのまゝでね、もし御起稿中の作物を他の書肆へ轉賣になッても、さらに差支ないから、今度お出でになれば、よく其事を申し上げて置けと、いはれましたので、甚だ失禮では御坐いますが、どうか當店への御相談は何事によ

らず總て一切、御免を蒙ります、つまり當店の如き資本の手薄い容量の淺い俗な書肆としては、とても先生のやうな高尚遠大な御著作を出版いたし兼ねまする結果で、かの文士方を伺ひ廻る男は、かう申して居りました、先生の御著述は先生の銅像が築かれて後、始めて世に出るンだから、まづこゝ百年や二百年では迚も出版の名譽を荷ひ難いと、實に先生を神樣のやうに恐れて居りますから」

いかに唯我獨尊の星影先生も、こゝまで平生の我田引水を會釋もなく切り崩されては、流石に一言半句も無く、あッと呆れしまゝ小田の蛙の啼き損ねたるが如し、

まして前夜よりは元の巣に歸れぬ身、今この文雅堂には嚙んで吐き出さるゝ如く、進退こゝに谷りし詩人の立往生、加之も人知れぬ胸に戀あり、人の見る前で此侮辱に遭ひ、もはや天地に倚るべきところなし、あゝ何とせん、

星影先生、たゞ自己ばかりを人間以上に遠く飛び放れたる雲中の靈物として、苟くも自己以外の他を見下すこと糞中の蛆蟲に等しく、口を開けば忽ち俗と呼び醜と叫びながら、その實は糊細工の如き案外の脆きところありて、文雅堂の店員に以後一切の關係を絶たるゝや否、あッと呆れしまゝ啞の如く顏色を失ひ度を失ひつゝ、さらぬも前夜より立倚る影を失ひし折柄、おはれ半泣きの澁面に悄然として去りぬ、

星影先生の立去りしより凡そ二時間の後、わざと店頭を通り過ぎながら、俄に思ひ出せし如く立戻りて、入り來りしは例の瀨田とよ子、

「あの、ちよいとね、あの何か新體詩の本は、ありませンの」

「入らッしやい、御坐いますよ、只今お目にかけます、よほど新體詩の作物も近來は多くなりまして」

「星影といふ、先生のですよ」

きくや否、店員いづれも思はず目と目を見合はせし視線、一時に瀬田とよ子の廂髪へ注いで眉を顰めぬ、

「へエ、星影先生、はてな、どういふ先生ですか、もし御間違ひぢや御坐いませンか、いッかう手前どもでは」

「あの、星影先生、當店に、當店が文雅堂さンでせう」

「いかにも、手前方は文雅堂ですが、その星影といふ先生は、よし他店の出版にしても、わけて新體詩の先生方は外の著書と違ッて數が尠う御坐いますから、お名前は悉く承知いたして居ります筈で、しかし、星影、星の影ですな、おい誰か店中に新體詩の作者で星影といふ先生を知らないか、何、そンな先生は日本に無い、はゝゝはゝゝふざけた事をいふ奴だ、いや斷じて御坐いませンさうで、貴孃、失禮ながら、どこで御聞きなさいました」

「ちよいと、お友達に妾」

「そりやァ貴孃、きッと何かの、お聞き違ひで御坐いますよ、なるほど、星の影といへば菫の香と流行の對句で、是非ありさうな名ですが、はゝゝゝ事實、御坐いませンね、しかし名の知れない、書肆の相手にしない、つまり自稱自尊の方には隨分、なか〳〵恐ろしい大詩人があるやうで御坐いますから、その方面は格別ですが」

「おや、さうですか、お邪魔をしました事ね」

「外の先生では、いけませンですか」

「いづれ、またね」

ふいと立去りし後姿を見送りて、文雅堂の店は俄の笑聲に溢れぬ、

「はゝゝゝどうだい、星影先生にも愛讀者があるぜ、もう二時間も早けりやァ、事だな」

「まだ出版もしないに愛讀者があッて堪るかい、ありやァ此頃の式部淫賣かも知れないよ」

「や、さう考へて見ると猶更ら以て面白いね、實に妙だね、あの先生に今あの女とは取合はせが珍だ、よほど奇態だ、まるでポンチ繪だ、旦那の居ないのが、殘念だよ、見せたいね、はゝゝゝ」

「神田の文雅堂は乃公が自由になる、とか何とか吹いたので、牝が香を嗅ぎに來たンだらう、はゝゝゝとンだ香を嗅いで驚いたらうよ、はゝゝゝ」

文雅堂の店員に殆ど冷笑の語氣をもて迎へられし瀨田とよ子、流石の面皮も聊か平生の彈力を失ひし心地、ぽッと赤くなりて其まゝの足早に立去りしが、また思はず小首を傾け出しぬ、

燒芋の蒂と麵麭屑の境涯を、わざ〳〵訪ひ來しは慥に出版書肆の主人、その翌日あの鄰屋の車夫が長屋中を鑑定の自慢顔に喚き散らせし後、二三度も店員らしき男の訪ひ來て本人また頻りに筆を執りつゝあるは正しく新體詩の原稿、わけて現在この身のために一夜その書肆へと言へば、尠くとも忽ち言行一致の十圓を產み出せしのみか、神田小川町の文雅堂とは本人の口より聞き取りしに、その文雅堂が諺にいふ木で鼻を括りし挨拶、さては妬み半分の惡戲に嘲弄せられしかと、今更ら腹立たしき瀨田とよ子の膨れ面、いかにも前後の事實に照らして無理の無いところなり、

口惜しけれど腹は立てど、事實に於て當分まづ糊口だけは取止めたりと、著述の有無よりも戀よりも金と我身の事、俄に勢ひを得て其まゝ歸らんとせしが、念のため途中の或雜誌店へ立寄りつゝ、餘所ながら新體詩人の星影先生を問ひしに、ふしぎや其名も知らずといはれて、また五里霧中の瀨田とよ子、はッと再び顰めし眉もろとも、さ

らに他の二三軒を探れば、いよ〳〵案外の見當外れ、いづれも豆腐屋で鐵物の相場を聞くが如し、

かうでは無い筈、かうあるべき筈なしと思へど、第一の文雅堂あの挨拶、他の書肆は猶更の體に、現在の事實を事實とせる瀬田とよ子、ます〳〵迷うて夢うつゝの如く、たゞ茫として歩む折しも、背後より我名を呼ぶ聲、

「もし、ちよいと貴孃、伺ひますが瀬田さんと仰しやいませンか」

思はず振り返れば、黑鴨の自用車夫、

「はい、妾、瀬田といひますよ、何か御用なの」

「只今、あれに主人が居りますから、もし瀬田さんと仰しやれば」

中腰の慇懃に車夫が指さす方を見れば、舶來の小間物商店より立出でし昔の友とは名のみの上田とし子、今は當世紳士として人に知られし川口保の令夫人、みる目も眩ゆ

きほどの盛裝を凝らしながら、わざと氣輕く足早に歩み來りぬ、

例の吉川實が事もあり、現在の我身は今かくの恥づかしさに、はッと思へど遁げられもせず、はや眼前に迫られて照り返さるゝ心地、加之も昔に變らぬ愛敬は、却ッて變りし我身の果を嘲らるゝが如し、

「瀬田さン、お久しう御坐います事ね、今あの店へ買物に來て居りましたの、すると貴孃が、ほゝゝゝゝしかし、いつも御機嫌よくて」

「上田さン」

「あら、上田の姓は御免を蒙りますよ、上田よし子は一初、只今は川口の妻で御坐いますからね、時に瀬田さン、先月、あの吉川とかいふ人を貴孃、わざ〳〵、ほゝゝほゝゝ直接、貴孃が入らッしやれば宜いにさ、その節お手紙は確實に頂戴いたしましたよ、御親切に對して兎も角も百圓お渡し申して置きましたの、お受取下さいまし

たらうね、幸ひ、ついでですから、これだけ別に念を押すほどの事でも御坐いませンが、ほゝゝゝ只今お住居は何處、電話は何番ですの、ちよいと貴孃おかけ下されば宅に居りますから是非、お近いうち、お遊びに入らッしやいな、お待ち申して居りますよ、いづれ、また」

すッと振り返りて車夫を招きながら、さも馴れし體に身輕く打乘るや否、そのまゝ韋駄天の如く馳せ去りぬ、

第一の的と思ひし文雅堂のために嚙んで吐き出され、もしやと思ふ他の書肆にも木で鼻を括られ、ぼッとして立歸る途中、また案外の不意に呼び止められし上田よし子のため、加之も今は紳士の夫人として眩ゆき盛裝に照らされながら、殆ど侮辱的に電話の番號まで聞かれし口惜しさ無念さ、ぶるゝ〳〵と怨恨の廂髪を顫はして泣くにも泣かれぬ澁面を作りし瀨田とよ子の顏色、畫にも描けざる圖なり、

まして吉川實の手より受取りしは、其日の車代として三圓のうち二圓なりしに、百圓とは偖こそ、あッと呆れて驚いて今さら反返れば、あの三人が舌を出して抃舞雀躍しながら立去りし其時の姿まで、ありゝゝと目に浮ぶのみか、うかゝゝすれば浮世の外の半亡者と思ひし相手にも、わづか十圓の端た金にて其後の六七度を思ふ存分に慰まれし心地、

あまりの腹立に氣は遠く我を忘れて五體の中心を失ひつゝ、夢が夢中の小石に躓きながら、やうゝゝ八軒長屋の自己が塒へ身を倒すが如く走せ入れば、今かゝゝと待ち受けし松坂あさ子、顏色を變へて聲を潛めぬ、

「瀨田さン、大變ですよ、どうしませう、前夜の事が、知れたやうですよ、あの空屋から奥へ遁げ込ンだ片相手は、きッと貴孃だッて」

「えッ、誰が、そンな事を」

「誰ッて、長屋中でさ」

「あら、妾、さうで無くッても口惜しくッて、あさ子さン、口惜しくッて堪らない事があるンですよ」

をりしも表障子を、そッと開けて差入れし面は例の朝鮮髯、前夜より腕を組んで考へ込みし果に此奴いよ〳〵今日の音頭取なり、

「や、片相手が歸りなすッたね」

瀬田とよ子も進退こゝに谷りて、もはや居るに居られぬ破れかぶれの自暴自棄、さらぬも癇癪まぎれに墮落の本音を吹き出しぬ、

「おや、貴君、妾に片相手とは、全體、どういふ事ですの」

「どうも斯うも前夜の内證、あの空屋の一件、はゝゝゝ酷いぢやァありませンか、さンざ夜の夜半に長屋中を騒がして、それも宜いが姫ごぜのあられもない、だしぬけ

に飛び出してさ、おまけに戸を抱いて打ッ倒れた本人は拙者ですぜ、その上を踏まれて遁げ際の後足に頤まで蹴られて」

「何ですッて、貴君、何と仰しやるの、前夜あの空屋から遁げ出した賊を、妾だといふンですか、妾、なぜ賊です、なぜ妾が賊です、貴君どこに證據を持ッて居なさいますの、まさか大道の賣卜から占ひ出した結果でもありますまいから、このまゝには承知しませンよ、いゝえ、あさ子さン、他の事と違ひます、妾の生涯に關することッてすもの、貴君お這入りなさい、這入ッて下さい」

「はゝゝゝ何も賊とは言ひませンよ、しかし空屋で闇がり紛れの云々、その二人の一人は確に星影先生が外へ遁げ出したまゝ今に歸らないといふ見當が付いたンです、して見ると脱穴の無い奥の方へ遁げ込ンで不思議に姿の消えた片相手は誰でせう、近ごろ十目の見るところ長屋中の相場が既に極りましたよ、はゝゝゝしかし、お

氣の毒でしたね、さういふ事と知れば、わざ〳〵這ひ出して往ッて御娯樂の最中を破るンぢやァ無かッたに、拙者また踏ンだり蹴ッたりされなくッても濟ンだにさ、なァに御相談に依ッては宵から夜半まで家に居らない業體だ、どうせ不在中お貸し申してもね、はゝゝゝゝ」

流石の瀨田とよ子も、ぐうの音も出ず目を剝いて上脣を嚙み占めながら、おもはず差俯きし折しも、また一人の寄手は例の熊さン、勢ひ込んで大聲に喚き出しぬ、

「八卦屋、賴むぜ、しッかり遣れ、乃公が付いてるぞ」、

朝鮮髯まづ先鋒として攻め寄せし背後より、例の熊さン今日の一日これがために休みしほどの勢ひ、わけて星影先生を失ひし癇癪まぎれの大聲、瀨田とよ子の頭上も割るるばかりに吐鳴り込みぬ、

「おい八卦屋、そこ退いた、新手の熊さン入れ替りだ、時に廂髪さンへ、どうしたも

ンですい、こンな事のねエ前に言ッたンだぜ、ふざけた調子に乘ッちやァ、いけねエよ、をかしな眞似をしなさンなと、えゝかう、忘れやァしめエ、つひ過日のこッた、どうせ相手の遁げ廻ッた迷惑を無理無體に引摺り込ンだ業だらうが、よしてくれエ、猫が魚類を取ッたやうに空屋なンかへ咬へ込ンでよ、太エ女だ、全體、あの先生ァ乃公が氣に入ッて平生から贔屓にする先生といふ事が分らねエか、いくら先生の方が油斷あッたにしろ、うぬのやうな阿魔ッちよの自由にされて堪るかい、第一この熊さンの男が立たねエぞ、さァどうしてくれるンだ、それに何だと、今聞いて居りやァ妾は賊でねエ、べらぼうめ、人の物を取ッた盜賊の方はな、罪が淺くッて後の始末が宜いンだ、考へて見ろ、お可哀いさうに先生は人が善くッて根が正直だからな、驚いて外へ遁げ出したまンま未だに歸ッて來なさらねエが、うぬの方は女の癖に平氣の面で、しやァ〳〵と畜生、恥を知れ恥を、夏の蚊だッて刺し損ッち

やァ一時、ちよいと面目なくッて、どッかへ飛ンで行くもンだぞ、おい、正當に向ひ合ッても嫌に出張ッた廂髪で滿足に面の見えねエ女だ、ぐッと上げろい」

鄰屋のお虎婆、不意に皺くちや面を突き出しながら、例の十圓その一割を貰ひしだけは確に饒舌りぬ、

「何だね熊さン、自分が跡取の若息子を近處の後家に取られたでもあるまいし、さういふもンで無いよ、空屋でも簀子の下でも宜いぢやァないか、お互に承知の上で他人の迷惑にならない事をしたンだからね、はゝゝゝ熊さンは兎も角、おい八卦屋、汝は何だ、平生から一方の片相手と取わけて別懇にでもした交際かね、いゝ年をしやァがッて、物の正體も見定めず夜の夜半に騒ぎ出すからだ、近所に事なかれといふ理由を知らないか、痩せッこけた面で妙に出洒張ると爲にならないよ」

八卦よい屋、はッと思はず凹めば、ぬッと出る熊公いよ〳〵勢ひ猛なり、

「やい〳〵死に損ひめ默ッてろ、自分の息子を近處の後家にしてやられりやァ、却ッて親の面倒は助かるが、あの先生を此、おたンちンに喰はしちやァ承知の出來ねエ熊さンだ、第一かういふ時は善くッても惡くッても攻手に加はる奴が、今日に限ッて防ぎ手とは妙だ、はゝァ婆アめ幾何か舐めてるな、さうで無くッて今まで面も出さずに辛抱の出來る奴かい、おい八卦屋、千三屋も鑛糞屋も呼び出して來い、かうなりやァ長屋中の大評議だ、相手を叩き出すか此方が出るかの境目だ、さァ覺悟しろ」

熊公いよ〳〵騎虎の勢ひ、この八軒長屋に於ける自治體の制裁力を持ち出しぬ、

戀は神聖にして愛は生命の露といふ瀨田とよ子も、一切の物質外に超然として理想圓滿なる大詩人の星影先生も、事實は向島の牛の御前に神聖の境内を汚して木下闇の轉び寢に始まり、その最終は猫の如く長屋の入口なる空屋の闇黑まぎれに生命の露を吸

ひ合うて、加之も鄰屋の朝鮮髯に理想の圓滿最中を驚かされ、内と外とに狼狽へて遁け出せしまゝの別離とは、山嶽震動して鼠一疋の飛び出せしよりも果敢なし、

されど星影先生は多少まだ流石に良心の捕虜となりて、どこへ彷徨ひ行きしやら、あ

はれ其まゝ歸らねど、瀬田とよ子は事いよ〳〵露顯の曉、なほ依然として平氣に濟ましし込みしがため、果は長屋中の包圍攻撃に逢ひ、自治體の制裁力に攻められて居るにも居られず、松坂あさ子もろとも河豚の如き膨れ面を叩き出されぬ、

あとには熊さン、外に用なけれど夫婦が半歳分の齒磨きに貯へし鹽を兩手に掴み出して、長屋の入口より奥まで初雪の如く蒔き散らしながら、朝鮮髯と石作を相手に例の高調子、

「清淨々々、まづこれで化物を退治て仕舞ッたから、どうか斯うか氣が濟ンだよ、はゝゝゝしかし石作さン見たかね、あの廂髪め、いやに恨めしく乃公の面ばかり睨ンで出やァがッたぜ、だが怨恨は乃公よりも八卦よい屋にある筈だ、はゝゝゝ」

「いや、少々ぐらゐ怨まれても宜いね、朝夕あの變な面を見るよりやァ優だ、拙者この身に取ッては別段これといふ關係もないが、ふしぎに氣の食はない女だよ、あゝ

いふ正體の知れない怪物が居るから一蓮托生、いづれも今まで運が向いて來なかッたンだぜ」

「さういへば、いよ〳〵これから福の神が舞ひ込みさうたが、まだ怪しいぜ、八軒長屋のうち急に三軒の空屋が出來たからね、兎も角この三軒の空屋へ落ち込ンで來る奴を見屆けた上のこッた、偖どういふ奴が浮世の床板を踏み外して來るか、例の破戸書生や今の廂髪に輪をかけた連中ぢやァ叶はないぜ、ねエ熊さン」

「眞實だ、しかし野郎は野郎で、まだ何とか始末は宜いが、掘り返して蓮根にもならねエ當世流の蓮ッ葉ばかり、ばさ〳〵とした女ァ御免だぜ、どうだ、大屋には濟まねエが、以來この長屋を女人禁制としちやァ、お虎婆は偖置いて、公乃の嚊ァは別だよ、はゝゝゝ」

「や、面白い、面倒が無くッて宜いよ、ねエ石作さン、お互に情婦は外で持つ事と極

めてね、はゝゝゝ」

「さうさ、到るところ情婦に追ひ廻されて、いつ何時こゝへ押し寄せらるゝか知れない身分だからな、結句、さうなりやァ枕を高く安心して寢られるさ、はゝゝゝゝ」

をりしも正面の總雪隱より悠々と罷り出でたる鑛糞野郎、酒落かと思へば眞面正に不服を唱へ出しぬ、

「ちよいと待ッて貰はう、今月の下旬か來月の初旬には、いよ〳〵九州の金山一件で芽を吹き出す筈だからね、誰いふとなく傳へ聞いて、また昔馴染の女が尋ねて來ないとも限らないよ」

已むを得ざる境遇に迫られて一時の方便上、有形の肉體は横へても無形の愛は動かさぬといふ、その一時の方便に供せし星影先生の行方を失ひしのみか、文雅堂のために

は嚙んで吐き出され、他の書肆には木で鼻を括られ、ぽッとして歸る途中を昔の友に呼び止められて殆ど侮辱的に扱はれ、わざ〳〵往來の中央に當世紳士の夫人盛裝と、落ち果てし我身を對照されつゝ、口惜しまぎれに走せ歸れば待ち受けし長屋中のため包圍攻擊せられて流石の瀨田とよ子も居るに居られず叩き出されし半泣きの澁面を、そも〳〵この上の浮世いづこの穴を持ッて行くべき、

尻輕に渡り歩く奉公猿の下女と一般、出るにも入るにも荷物は風呂敷包たゞ一個の境涯ながら、組んで落されし松坂あさ子、あまりの不意に驚いて元來の靑ざめし顏色、猶更ら靑く目ばかり光りぬ、

「どうしませう、瀨田さン」

「どうッて、かうなッた以上、もう仕樣が無くッてよ、兎も角も十圓のうち、まだ六圓ばかり餘ッてますからね、此お金の盡きない間に何とか、あさ子さン、善後策を

講じて」

「だッて口惜しい事ね、あンな無教育な劣等な、車夫や賣卜者のため强迫的に出されたと思へば、妾、口惜しくッて、どう考へても瀨田さン、口惜しくッて堪りませンわ、これ以上の殘念な事はありませンよ、自然の運命に迫られて出るンぢや無いンですもの、つまり彼等のため、あとで手を拍ッて笑はれる材料を殘して來たンですからね」

「しかし、あさ子さン、取るに足らない彼等ですよ、妾だッて、貴孃だッて、まだ彼等のため復讐の方法を求めるほど、そこまで墮落して居ないンですからさ、それより眼前の方向ですよ、ねエあさ子さン、妾、ふと考へたの、かうしては、どうでせう、妾と違ッて貴孃ア幸ひ、小石川の原町とかに親類があるンでせう、ですから暫時、その親類の方へ、もし妾等の身に此上の悲境が來るものとすれば、知りつゝ徒

らに伴ッて居ても、つまりませンよ、今のうち貴孃だけでも出來る手段を取ッて、時機を待ッた方が策の得たもンかと思ひますの」

「親類は親類ですが隨分、これまで迷惑をかけて、世話になッたまゝ一二年も訪ねない親類ですからね、どうせ故郷の方からも其後、いろンな事を云ッて來てるでせうし、猶さら妾、また妾が、その方へ行くとして貴孃、瀨田さン、今後、どうなさる決心ですの」

「妾は妾で、決心した事があるの、もう二月で、出て來る情人でせう、だから妾それまでの間は、どッか所謂る慶庵の手に掛ッてでも凌ぐ方法を付けますからね、この六圓のうち二圓だけ貴孃へ渡して、あとの四圓で妾、きッと身を處して見ますよ、小石川の原町で何番地の何といふ親類か、それさへ分ッて居れば妾、あの情人達の出る前に必ず、萬事の打合せをしますからね、あさ子さン、斷じて貴孃さうなさいよ、さうして下さいな」

どうしても瀨田とよ子は松坂あさ子より常に策謀多く罪深く、うき世の業には一枚の上に出來たり、

業平町の八軒長屋、さても落ち果てし人間の底かと思へば、底の底ありて下の下ゆく浮世の流れ水、あはれ假にも我家と定めし塒なれど、こゝは其日々の化物が入相の鐘もろとも四方より落ち合ふ木賃宿、上野の山の彼方なる金杉町を通り過ぎて、千住大橋の此方なる場末に軒を竝べし三輪新町これなり、

降る雨の簑輪の里に袖ぬれてといへば、情の廓も近き紙衣の末、何とやら昔の名殘に風流めけど、今は文字さへ錢勘定の三輪となりて、新町とはいへど、古く破れし叩き屋根の軒竝びに木賃宿の掛行燈、廂は傾き柱は歪みて一種の惡臭を籠めしも道理、い

づれ眞直に世を渡りて馨しき匂ひする奴の半時も居れぬ場所なり、

上等の別室ありといへるが八錢より十錢、普通一帶が五錢と六錢の間、加之も夜だけの事、平均の一個月に積りて二圓内外とすれば、月に七十五錢といふ八軒長屋の九尺一間を晝夜我物の二錢五厘づつに比べて頗る案外の高價なれど、みす〳〵それを拂うても同じ塒には住めぬ奴の落ち込むところ、無い時は平氣の鼻唄三昧に野宿する徒輩の轉げ込むところなり、

木の根を枕の露に輕く身を横へし事はあれども、流石に秋の夜長を只一人の野宿もしかねてや、この三輪新町の木賃宿を時に取ッての便利として宵闇の掛行燈うす暗き物影より、こそ〳〵入りしは例の瀨田とよ子、十錢の別室とは本人いまだ此里に落ち切らぬ覺悟なり、

別室といへど破れ疊二枚、たゞ知らぬ他人と不意に枕を竝べて睡らぬといふだけの事、

煤けたる反故張の障子一重を隔てゝ隣席の別室には、また同じ流れの身の末を置く奴ありて、加之も如何なる荒くれ男ぞ、もし夜の夜半に何事ありとも、人殺しの外は驚いて救ひに來るほどの宿でなく、そのまゝの腕力沙汰に逢ふべき筈と思へば、うか〳〵夢も結ばれず、いかな瀨田とよ子も今さら心細く薄氣味わるし、

手細工の鴨居を宙に渡して、取合の柱に懸けたる豆ランプは荒土の食み出でし天井に油煙を吐きつゝ、その下を隔てし反故張の障子際、いとゞ薄闇きを僥倖、せめて隣屋の人相を見て置かんものと、こゝまで落ちても猶まだ我身の惜しき瀨田とよ子、そッと破れ目より差覗けば、壁に倚りて痩せたる達磨の如く膝を組みながら、無言のまゝ兩眼を閉ぢて沈思默考の男、加之も鼻頭の眼鏡に頭髮の頸首まで伸びし體、や、や、正しく星影先生なり、

例の朝鮮髯に驚かされて空屋より飛び出せしまゝ、夜一夜を彷徨き廻りし翌日の朝、

また文雅堂のために案外の一發を喰はされて、いよ〳〵進退こゝに谷りし最後の果は、あはれや十月の寒空に肌薄き單衣の重ね着、その一枚を脱いで途上の屑屋より得たる二十三錢も、今夜の木賃宿に盡きなんとする星影先生、もはや人間の末なり、將に痩せこけたる死骸を路傍の俗塵へ埋めんとする間一髪に近づきぬ、

壁に倚り膝を組んで目を閉ぢつゝ、いかに沈思默考すればとて、眼前に迫り來る浮世の事實問題は緣遠き新體詩の高尚幽玄を以て解決し難く、理想も神韻も今は一碗の冷飯に代へ難き苦痛慘澹の極、猶更ら空腹に力なく身は疲れ夜は更けて、たゞ茫然たる折しも、いづこよりか耳に入る聲、

「先生、先生」

はッと思はず見廻せど影なし、

さては戀、恐るべし人は心の器、その器の衰へしと共に心まで弱り果てゝ、自然に物

の響くが如く我みづから我を夢うつゝに呼びしかと思へど、また確實に聞ゆる聲、

「あら先生、妾ですよ」

隔てし反故張の障子、そッと開けて差出せし顏を、鴨居の上より幽に照らす柱懸の豆ランプに一目みるや否、星影先生、臍の中央に錐を揉み込まれし如く、あッと驚いて鼻頭の眼鏡を振り落しぬ、

「やッ、せゝ瀨田さン、ぢやァ無いですか瀨田さン」

「ないも、あるも、貴君、酷いワ、先生、酷いワ」

「どうして、かういふ、こンな、ところへ全體、どうしたンです」

「妾より貴君こそ、どうして先生、まァこゝへ」

「僕、僕は、や、僕は、あの夜、あの後の僕は、實に、殆ど」

「妾も先生、あの時ね、あの時は夢中でしたが、あとで妾、あれがため妾の苦痛と悲

哀は、とても貴君の想像に及ばないほどの事があッたンですよ、もう此ま〻貴君を見る事が、出來まいかと思ッて妾、悲泣の極に沈ンで仕舞ッてよ」

「兎も角、ふしぎですな、妙ですね、實に奇遇だ、僕が今夜こゝで貴孃に逢ふとは、たゞ意外といふ以上に適切な言葉を持たない、わづか中間一日で、やう〳〵三日目だが、もし再會の期なくば遂に長く人にも語れない胸に忍ンで、互の生涯に於ける祕密の涙となるべき僕と貴君と、その三日目の今日、や、正に人爲的でない、つまり俗にいふ自然の緣なるもンでせう、しかし、どうして、かういふところへ」

「それが先生、妾、口惜しくッて、さう急には到底、言ひ盡し得ませンもの」

「なるほど、さうあるべき筈ですな、僕が思ッてるよりも、より以上に女としての貴孃は、無論、さうでせう、いや僕は只こゝに感謝の外ないですよ」

星影先生も思はぬ不意の案外、瀨田とよ子も思はぬ不意の案外、業平町の八軒長屋より三輪新町の木賃宿といへば、運命の順序に於て何の不思議は無けれど、こゝで落ち合ひし互の意外と意外に驚きつゝ、聲を潛めて語りぬ、

「だッて先生、今いふ通りの目に逢ッたンですもの、殆ど侮辱の極ですもの、いくら妾でも、忍びませンよ、居るに居れませンわ」

「や、實に殘酷な奴等だ、車夫の熊なるものは兎も角、まだ多少その間に恕すべき點の無いでも無いが、あの賣卜者め、怪しからン奴だ、ところで、あさ子さンは、どうしたです」

「あの女は、小石川に親類があるンですから、無理に、便宜上その方へ、妾だけ、已むを得ず、こンなところへ」

「よろしい、さらに僕が今後の事に一考しませう」

「しかし先生、貴君、あの机も書物も、第一あの原稿も其ま〻なンでせう、また妾、

貴君に聞きたいの、たしか貴君の出版書肆は、神田の小川町で、文雅堂といふンですね」

「文雅堂です」

「あれ、不思議だ事」

「どう不思議です」

「實は先生、妾、あの翌日、もし先生がと思ッて、その文雅堂へ、それとなく尋ねて行きましたの」

「えッ、文雅堂へ、僕を、むゝさうですか、店の奴等、どう言ひましたね、事に依ると何か、殊更に設けて悪く言ッたでせう、平常の僕を僕として見る文雅堂だから、や、驚いたらう、はゝゝゝ僕としては尋ねて來べき筈のない女だからな、はゝゝゝ」

星影先生、流石に今この場合それともいはれず、はッと思ふや否、元來の不得手ながら時に取ッての世才を絞り出して笑へば、もとより或點まで事實に遭遇せし瀬田とよ子、猶更ら自己が身の利慾に引かれて、いよ〳〵それかと思ふ體、

「ほンとに口惜しい時には、何故かう口惜しい事ばかり重なるンでせう、文雅堂の店で貴君、先生の名も、知らないといふンですもの、つまり妾は馬鹿にされたンですね、嘲弄されたンですよ、悪戯はれてさ」

「はゝゝゝどうも書肆なンかに居る店員は、人が悪くッて困るよ、はゝゝゝ」

「しかし先生、貴君、まだ文雅堂へ往らッしやらないの」

「實は今いふ、その原稿を、あのまゝ捨てゝ出たからね」

「もう、業平町へは、お歸りなさらない決心でせう、妾も、かうして出たンですからね」

「無論、歸れないね」

「それでは貴君、原稿も、ついでに他の物品も一切、お取寄せなさいな」
「さァ、その取寄せるに就いてだ」
「入らざるこッてすよ、彼等に遠慮も何も、自分の所有物ですもの、幸ひ隣屋で萬事貴君に近しかッた、あの車夫の許へ誰か往復の賃錢に手紙を添へて人を遣れば當然その使者に渡しませう、渡さずに居れますまい、かりにも故障のいへない事ですから」
「なるほど、さうだ、そこに氣が付かなかッたよ」
「ほゝゝゝあまり先生は、放任主義に過ぎますよ、もし今夜こゝで逢はなければ妾もあのまゝ放任されて仕舞ッたンですね、ほゝゝゝ」

八軒長屋の門口に屑屋の荷車を置いて、そのまゝ入りし男、

「ちよいと伺ひますが、此お長屋に熊さンといふ人が」
をりしも出合頭の熊公、
「わッしが熊だ、しかし汝さン、何の用だい」
「手紙を、この手紙を御覽なすッて」
「何だ、手紙だ、間違ひぢやァねエか、手紙なンかァ受取る相手のねエ人間だ、全體どこの誰だい」
「いえ萬事その手紙にあるンですから、實ア御隣屋に居た人の雜物一切を買ッた屑屋ですよ、手紙は賣り渡した本人の證據ですからね、御面倒ですが、どうか立合ッて貰ひたいンです」
「や、先生だな、おい八卦屋、ちよいと出てくれ、汝の役に立つ事が出來たい、この手紙だ、讀ンでくれ、さァいよ〳〵所在が分るぞ」

「はゝァ手紙かね、なるほど、人間には聊か覺束ないところもあるが手跡は美事だな、よく達者に書いてるよ」

「文句だい、早く文句を讀まねェか」

「むゝこりやァ熊さン、かういう文句だよ、長らく世話になッた禮を厚く陳べてね、さて其まゝ捨て置いても宜い品だが都合上このものに渡してくれ、いづれ近日あらためて出るといふンだ、つまり先生、もう歸らない決心で、品物を取りに來たンだ」

「おッと、よし、それで宜いぞ、役目は濟ンだ、餘計な口を出すな、引込ンでろ、時に屑屋さン、本人の所有を本人の手紙で取りに來たンだから、誰にでも渡す事ァ渡すがね、この本人は今、どこに居るンだ、是非、逢ひてェ事があるンだから同伴に行かう」

「そこですよ、それに付いてさ、どういふ理由か知りませンがね、實ァ言ッてくれる

なと、堅く頼まれたンです」

「頼まれたッて、言へねェ事ァ無からうよ、言ッたッて差支のねェ乃公だ、さァぐづぐづ言やァ乃公が持ッて往ッて本人に渡す分だ」

「しかし、差支が無きやァ渡して下さいな、それがため、その手紙にある通りですよね、嘘でない證據は一閑張の机と白の古毛布二枚と、三尺の吊戸棚に雜誌類が三四貫目と、硯に筆に墨さ、別に洋書が三册と何だか佛臭い經文の卷いたのが二本、改良半紙を綴ぢて細ッかく書きかけたものが二册、どうです、間違ひますまい、かういふ工合に品物を聞いて、物を見ない前に大ざッぱの相場價で買ッて仕舞ッたンですよ、もう錢は渡して仕舞ッたンですからね、よし居所を言ッたところで本人は居るか居らないか分りませンぜ、つまり安ッぽい足の早い宿屋で一夜宿泊のこッてさァね、はゝゝゝ」

「おい屑屋、目を開いて見ろ、こゝァ業平町の八軒長屋だ、華族の隠居が住ンでる別荘ぢやァねエぜ、べらぼうめ、安ッぽい一夜宿泊で品物も見ねエ手紙一本に前錢を拂ッて來る奴があるかい、さァ本人どこだ、白狀しろ」

「そりやァ困るンですよ、實は本人に賴まれたンぢやァないンですからね、その宿の亭主が引受けて、確く約束したンですから、しかし手紙は本人の手紙で品物も本人の品物とすりやァ、文句のない筈だ、まさか汝さンに差押へられてゐる理由も無からうし、たゞ立合ッて貰ふだけの事さ」

「おい八卦屋、また汝の役が出來たよ、乃公に手紙を一本書いてくれ、相州鎌倉の空屋へ忘れて來た金の茶釜を此屑屋に賣るンだからな」

はや喧嘩腰にならんとするを、家内より女房お菊そッと招いて耳に口、何をか私語けば熊公おもはず首肯きぬ、

「なるほど、それも然うだな、自分の所有になるぢやァなし、つまらねエ他人のこッて爭ッてるより身の稼ぎが大切だ、ぢやァ出るぜ、おい屑屋、乃公の代理に嗅ァを殘すからな勝手に持ッて行きねエ、面倒だァ」

もし星影先生に新體詩といふ不治の難病さへなくば、元來の惡人でも愚物でもない今年二十九の男、こゝまで浮世を踏み外して落ち込む筈は無けれど、人事一切を其まゝ詩化して味噌も糞も高尚幽玄の理想に當て行はんとするがため、いよ〳〵人間の緣に遠ざかりて衣食住の道に疎く、わけて戀といひ愛といへば猶更の夢が夢中に嬉しく有難く、瀨田とよ子の如き女に對しても目鼻を失ひつゝ、只これ感涙の外なし、加之も案外の木賃宿にて思はぬ意外の奇遇は、殆ど狂するばかり感謝の念に我を忘れて、神の力に引き合されたるが如く隨喜渴仰の涙に咽び返り、もはや自己が生涯の運

命を擧げて彼が一顰一笑に投ずるも惜しからぬ體、いふがまゝに手紙を認め宿の主人に談合して、幸ひ同宿の屑屋を、八軒長屋の古巣へ遣りしが、たゞ心に恐るゝは熊公の事、兼ての氣性、我への深切に出過ぎて、もしや喧嘩腰に渡すまいかと思ひの外、無事に一切の品を持ち歸りしかば、本人よりも瀬田とよ子、まづ小氣味よしと胸の溜飲を撫で下しながら手を拍ッて喜びぬ、

もとより内兜を見透せし屑屋の踏み倒しながら、夜店に曝して一册づつ賣れ行く品と見て取りて雜誌四貫七百目で一圓五十錢、古けれど西洋洗濯にかけて店頭に吊れる品と見込みし白毛布二枚が一圓、一閑張の机は木賃宿の亭主に叩き落されて十二錢、以上あはして僅に二圓六十二錢も折柄の大金、まして西哲の詩集三册は神田の古本屋に抛出しのまゝ二圓の價値あり、紺紙金泥の佛典二卷、いかに安くとも七八圓の價値あり、さらに第一この新體詩の原稿を仕上げし曉は二百圓と聞くや否、瀬田とよ子、猫

の如く咽喉を鳴らして喜びぬ、

「だから妾、いふンですよ、貴君、これほどの物品を、置去してさ、もし貴君この原稿を、あのまゝ彼等俗物の手に委して御覽なさい、勿體ない、たゞ鼻紙になるばかりですよ」

「はゝゝゝしかし、いくらでも頭腦にあるンだからね、僕としては、さう惜しくもないさ」

「惜しくなくッても、いくら頭腦の中にあッても、時間と勞力が費されてるンですもの、あまり先生は物事に淡泊すぎますよ、將來は妾が、どうしても、いかなる悲境にも伴ッて、出來るだけの事をする決心ですからね貴君、以後一切、妾のいふ事を反いては、いやよ、いけませンのよ、宜しいか」

「たゞ感謝するのみだ」

「時にね、前夜からでせう、まだ朝も喫べないンですから、晝飯には早いが、何か妾、買ッて來ませうか」

「や、さうだね、麵麭が宜からう、手數がなくッて、ついでにバタの小さな罐を一個ね」

「勝手は分りませンが、どッか其邊で、尋ねて來ませう」

六圓のうち二圓を松坂あさ子に渡して、自己は現在まだ四圓といふ金を懷中に捻ぢ込みながら、今しも屑屋より受取りし二圓六十二錢を其まゝ胸帶の間に插みつゝ、出で行く後姿を額越の星影先生、あはれや滿身の敬愛をもて見送りぬ、

はや喧嘩腰になりかけし熊公、そッと女房の入智慧を小耳に插むや否、俄に音なく靜まりて、わざと其場を外せしが、實は星影先生の雜物を持ち出せし屑屋の影より、身

を潛めながら慕ひ行き、せめて神田の書肆に緣あるところと思ひの外、三輪新町の木賃宿、いよ〳〵穴を見付けたり、さては先生こゝだなと思ひしが、あの空屋一件に狼狽へて飛び出せしまゝ身の置どころもなく恥ぢて忍びし隱れ家を、だしぬけの不意に驚かさば却ッて我眞情の通らぬ筈、もしや姿の見ゆる事もあるかと、その門邊を三四度も行きつ戻りつ窺ひし折しも、例の麵麭を買はんとて立出でし瀨田とよ子の姿に流石の熊公、あッと驚きぬ、

已んぬる哉と天を仰いで歎ずべきところを、熊公おもはず蟋蟋の如き舌皷を打ち鳴らしながら、無效だ、いけねェ、あの畜生が同じ穴たァ驚いた、もう飛び込んで諫言するだけの事ァねェ、おさらばだと思ひ切ッて其まゝ走せ歸ッたる熊さン、無學文盲の一本調子なれど、幽玄高尙の理想が詩的に腐りついたるよりは遙に立優りし男振なり、

八軒長屋の我家に飛び込むや否、ふンと鼻頭に冷笑うて鷲掴みの古手拭を輕く抛げ出

しながら、女房お菊の面前に大胡坐、

「おい嚊ァ、柱が曲折れて仕舞ッたい、ぴしやりと丸潰れだァ」

「何だね、妙な顔をしてさ、良人さん、あの屑屋に隨いて行かなかッたの、先生の居所が分らなかッたの」

「分ッたから驚いたのよ、三輪新町の木賃宿だァ」

「おや、木賃宿」

「それが先生ばかりぢやァねエよ、どうして落ち合ッたもンか、まさか狼狽へて空屋を飛び出した騒ぎに打合せも出來めエが、ふしぎに一方の阿魔ッちよが居るぜ、いけ洒ァ〳〵の例の廂髪を、おッ立てゝね、あれぢやァ、もう乃公も飛び込ンで彼是いふ氣がねエからな」

「あら、まァ、どうして、へエ、恐れ入ッたもンだね」

「恐れ入り過ぎて呆れの宙返りだ、乃公ァ只、きまりが悪くッて二度と再び顔が出せねエといふ先生の初心を猶さら高く買ひ込ンで、わざ〳〵往ッたンだぜ、雜物ァ一旦屑屋に渡しても、なァに汝、物も見ねエで前錢を出す筈ァねエからよ、直接また乃公が荷いで先生を引戻す氣だァね、ところが、畜生、あの阿魔の業と睨ンで脈を放して來たのさ、惜しい先生だが、もう無效だ、骨まで喰ひ込まれてるからな」

「ほンとに、腹の立つ小面の憎い女だねエ、折角あれまで陰になり陽になり、いろンな氣を揉ンで世話した先生をさ、さういふ馬鹿にしやァがッて」

「しかし、先生も今となッちやァ、まづいよ、仕方が宜かァねエよ、いくら何だッてあンまり安ッぽくて、だらしが無くッて、甘過ぎるからなァ、第一この乃公が長屋中の手前、口にも出せねエよ、おい嚊ァ默ッてろ、先生の事ァ一切、これッきりだよ」

もう無效だ、いけねェ、脈が上ッたと例の熊公にまで見放されし星影先生、いよ〳〵瀬田とよ子に喰ひ付かれて、魂魄ぬけ殼の五體となりぬ、

されど先生は人知れず愛の神に包擁せられたる心地、三輪新町の木賃宿に假寢(ゝ)夢も詩的の理想を其まゝの觀念、かの屑屋に賣り飛ばせし雜物の二圓六十二錢いまだ半を餘せるに、また牝鷄の羽ばたき激しく、殘れる洋書三册と經文二卷これを錢にせよとの時啼を作りぬ、

何事も唯々諾々の先生、實は我ための六韜三畧とせる西哲の詩集三册、惜しけれど愛の露には代へられず、二圓五十錢に拋げ飛ばし、かくなりし今までも祕藏せる紺地金泥の經卷二本を骨董屋に踏み倒されて三圓、あはして五圓五十錢を持ち歸れば、瀬田とよ子また今更に溢るゝばかり滿面の笑をもて迎へぬ、

「ねェ先生、いつまで貴君、こンなところに居ても、つまりませンわ、ちよいと手輕で便利で安いやうで、事實の打算上は案外に高いンですもの、第一、性格の違ッた下層の劣等物ばかり集ッて來て妾、いやですワ、嫉妬半分に貴君、いろンな事を言はれてさ、此お金で、どッか、また、業平町のやうな家を持ちたい事ね」

「なるほど、さうだな、到底こゝは我々の居れる場所でないから」

「また貴君、原稿を書くにしても、こゝでは仕樣がありませンよ」

「いかにも」

「ですからね、至急どッか、探しませう、たとひ何がなくッても、冷かな物質より互に心の暖かな方が滿足ですもの、つまり貴君と妾と人生に於ける最も幸福のホームを作るンでせう、妾、一日も早くね、それが希望ですの」

「や、人生これ以上の幸福はない、實に愉快だ、もはや他に驚かされて遁げ出すにも

及ばないからな、はゝゝゝゝ」

「ほゝ眞實ね、ほゝゝゝ妾、あの時の事を思ひ出しても、まだ胸が變な氣になります よ、あまり不意の恐怖に打たれてさ、生れて始めてですもの、よく怪我もしなかッた事ね、ほゝゝゝ」

「しかし、虛僞なき愛は自然、いかなる危急も神に守らるべきもンだからな、强き刄には敵ありとも、淸き戀の前には敵の來ないものさ」

「あら、事實ですね」

「ところで、家は、どの邊に」

「妾、今日か明日か、きッと二日のうちに探して來ますワ、その間に貴君、神田の文雅堂へ往ッて、何とか多少、どうせ貴君、脫稿すれば取れるンでせう、それを今、目下の急務に幾何か、必要なンですもの、二人の身を容れる家だけは出來ても、此

お金は一週間か十日の後すぐ、盡きて仕舞ッてよ」

「だが、さう急に迫らなくッても宜からう、賣文的の著者は兎も角、僕としてはね、どうも困るよ、第一さういふ事に就いての技倆は殆ど零だから、まづ一週間もあれば、ゆる〳〵考へてね」

「では、かうなさいよ、兎も角も家を持ッて、すぐ其日に手紙を文雅堂へ、まさか捨てゝ置きますまい、德義上、利害上、必ず誰か來るでせう、おや、妾、その時に居ては、變ですね、過日あの店頭で惡戲はれたンですから」

「その邊もあるよ、すぐ顏を見せても、をかしいからね、や、三四日も過ぎてから、やはり自分で出かけよう、いつか十圓を取ッて來た流で」

「あの十圓、貴君、どういふ工合に、取ッて入らしッたの」

「なアに、これまで一度も僕から金錢上を談じた事はないよ、あの時は、わざと俥に

乘ッて往ッてね、おい俥賃を拂へと言ッたのさ、すると流石に商人だね、わづか二十錢や三十錢を原稿料の内で引去れないから、途中で何か御買物なすッて下さいといふ口實の下に十圓紙幣一枚を出したよ、實に機敏なもンだね、はゝゝゝゝ」

「書肆も機敏ですが、ほゝゝゝ貴君も案外、策のある事よ」

「はゝゝゝ何のために、あンな名策が出來たらう、はゝゝゝ」

星影先生の塒と瀬田とよ子の塒とは、筋向ふ一時に俄の貸家札を張られて、どら猫の戀にも劣る一片の笑ひ草を長屋中に殘せしが、その色沙汰の飛び出せし入口の空屋、例の吉川實が古巣を塞いで、いづこよりか落ち込み來りし奴あり、

八軒長屋の生活上、もとより世帶道具のなきを怪しまず、身に從ふ妻子なきを怪しまず、たゞ怪しむは盛蕎麥一個づつ、近處合壁い義理人情も濟むべきところを、ざる

蕎麥三個に正宗の二合瓶一本づつを添へて配りし大福長者、そも〳〵この長屋には開闢以來の珍事なり、

加之も本人の容貌風采、いかなる者と見れば、永字八法の點に似たる滑稽的の眉毛びく〳〵と動かし、への字形の下り目に四邊きよろ〳〵見廻し、鼻は自然に天井を仰ぎ齒は緣の下を覗き込むほどの醜男ながら、ちらと遠目の一德は元來の色白に七難を押祕せし年輩二十三四の小品、聊か着古したれど絲織の袷に荒き大名縞の同じ羽織、ぞろりとして懷手の澄まし鹽梅、お納戸に一本獨鈷の博多帶、わざと自慢氣の素足に履物ばかりは新らしき兩ぐりの表附、聊か擦り切れし黑八丈の襦袢襟、をり〳〵氣にして押し込めど袖口の色褪めたる鼠縮緬ちよろ〳〵無遠慮に這ひ出しつゝ、てか〳〵光る出額いかに磨き上げしぞ、薄ッぺらな上唇を例の反齒へ被せし三角の尖り頤、殊更に身輕く自己を卑下するやうなれど、また人を冷かし半分の馬鹿にするが如き風あ

りて、好かぬ吹き出し烟草もろとも一種異樣の聲に呵しくもない事を打笑ふ工合、田舍大盡の親を持ちし放蕩書生の果でもなし、商人の大家を叩き出されし若旦那の末でもなし職工には猶更ら不似合なり、とても勞働者の筈なし、もとより會社員としては受取れぬ男、いづれ世の中に在ッて用なき奴の一蓮托生ながら、これは案外、さりとては不思議の怪物、いよ〳〵この八軒長屋に巣を構へたり、

件の怪物、件の風俗態度を以て、熊さン朝鮮髯お虎婆鑛糞の西川と千三屋の石作まで、いち〳〵長屋中の挨拶に立廻りぬ、

「や、これは始めて御目にかゝりますが、御覽の通り不意に新參の厄介物が一人、どうか今後、よろしく願ひます、實は御一同を無理にも御招待申して御交際のため是非、どッか料理屋へと、氣が付かない事はありませンが、それぢやァ却ッて御迷惑と心得、わざと差控へて萬事後日の事と致し、兎も角このまゝで當分お仲間入を願

ッて置きませう、はゝゝまた當に多く不在勝で、をり〳〵歸ッて來て、たまに寢るくらゐのこッてすから、猶更ら以て御面倒でせうが、衣類調度その外の一切は他へ預けて置いて別段こゝへは何も持ち込みませンから、その點は御安心下さるやう念のため申し上げて置きます、はゝゝゝ」

さァまず〳〵正體の分らぬ奴が舞ひ込ンだり、

相も變らぬ朝鮮髯、まづ第一番に向側の千三屋へ這ひ込ンで、これも同じ鑄型に出來たる例の石作と顏を見合すや否、

「いやはや大變な奴が舞ひ込ンだぢやァありませンか、どうですい石作さン、何と鑑定しますな、卦の本道にかけては聊か覺束ないが多年の間、いろンな奴を相手にして人馴れた拙者、中らずと雖も遠からず、大定それと人相風體で見當を付けますが、今度あの空家へ來た人間ばかりやァ、實に難題だ、いかにも分らないね、ざる蕎麥

三個と正宗の二合瓶一本づつは首尾よく胃袋に落着いたが、本人の正體どうも腑に落ちないよ、はゝゝゝ」

「眞實だ、それに第一あの風俗は何ですい、え、初心でなし半可でなし、通でないは

無論の事あッて身體に着馴れた調子でなし、一種奇態な着付け工合、嘔吐が出ますな、木綿でさへ無きやァ人間最上の綺羅と思ッてるンでせうが、や、實ァ可哀さうなもンだ、我々が昔の全盛を語ッて少しやァ世間體、恥といふ事を知らしてやりたいもンだ、加之も小癪に觸ッて堪らないのは初見の御挨拶さ、まだ卵子の殼を脊負ッた青二歳めが、てか〳〵と額を光らしやァがッて、とても隱し切れない反ッ歯を上唇で無理に包みながら、交際のため御一同を料理屋へ呼ンで一獻さし上げたい、はゝゝゝゝ筈のところ却ッて御迷惑と差控へたは宜かッたね、わざ〳〵差控へずとも宜いこッた、また當に不在勝ですが衣類調度は他へ預けてあるから御安心下さいとは、凄まじさも峠を越して只もう恐れ入るの外なしだ、考へりやァ憎氣はないよ、はゝゝゝしかし何でせうな」

「さ、そこだて、どうも拙者の隣屋へは薄氣味の惡い妙な奴ばかり住み込むよ、前の

吉川といひ今度の彼奴といひ、もし石作さん、あれで夜の夜半に變な聲を出して小唄の一節も唸られちやァ、堪らないね、じッと寢て居られないね、それが原因で煩ひ付くだらう、はゝゝゝは」

をりしも壁一重を隔てゝの聲は例の鑛糞、まだ九州の金山に芽を吹いた夢も見ぬ體なり、

「や、面白い談話ですな、しかし八卦屋さんも石作さんも、さう氣を揉んで馬鹿々々しい詮議するほどのもンぢやァないさ、あの正體は分ッてますよ」

「西川さん、どう分ッてますな」

「實ァ長屋中、いち〳〵挨拶に立廻ッた時、たゞ呆れて奴にばかり饒舌らしたから分らないのさ、ところを西川要五郎、すぐ切り込ンでね、本人の身分を白狀させましたよ」

「そいつァ手柄だ、全體どういふ素性の何物ですな」

「俳優さ」

「俳優、いえさ演劇の舞臺で藝をする俳優ですかい、あれが」

「つまり場末の壯士芝居ですよ、その藝名は花野露雄と言ッてね、書生俳優の下廻りですよ、ちよいと筋の立ッた奴にコキ使はれて、化粧前の水を汲む南瓜野郎さ、はゝゝゝ雜用飯を喰ッて三階に轉がるから不在勝さ、新らしい下駄なンかァ、きッと小道具の盗みもンだぜ、あの風俗は衣裳方を誤魔化して出た奴に相違ないよ、しかし俳優と名が付きやァ不思議なもンで、あンな出來損ッた野郎でも守ッ子や裏店の小娘に當りが付いて、をり〳〵引ッ張り込むために八卦屋さん、隣屋の空屋を借りたかも知れないね、はゝゝゝ」

「や、こいつァ堪らない、どうしたもンだらう、いよ〳〵煩ひ付くよ」

たゞ一口に呑んで壯士俳優といひ書生演劇と唱へ來りしが、もはや今日は舊俳優に對する新俳優の名稱に叶うて、確實に一種の技藝を備へしのみか、時勢に伴ふ劇界の刷新は、彼よりも多く此一派に希望を屬せらるゝ折柄、劇そのものとしては前途ますます發展の兆あり、俳優そのものとしては將來いよ〳〵大成の兆あれど、偖その下廻りの雜兵には言語道斷の南瓜野郎、箸にも棒にもかゝらぬ奴あり、舊俳優は數代連綿たる素封家の如く、時流に後るゝ恐れありながら、固く城壁を設けて叨りに出入を許さざれど、新俳優は卒然として起りし一代の富豪に等しく、門戸を開放して入り易きがため、風に連れ潮に從うて流れ込む魚類中には、頭も尻ッ尾も鰭もない奴、お王杓子は蛙になれど、かういふ奴は到底、都の俎に上るべき筈なく、田舍茶屋の汁の實にもならぬ奴なり、

されど本人また殊勝に自己を知るの明ありて、天晴れ腕を鳴らして劇界の大立物となる野心もなく、たゞ俳優といふ名目が嬉しさの餘りに飛び込んだ奴、その根を洗へば十中の八九、理髮店の下剃でも氣が利かず、活版屋の職工でも世に出られず、眞面目な商家には猶更ら勤まらず會社員となるには信用もなく保證人もなし、俥を曳くには脚が弱し土方するには力がなし、新聞配達は骨が折れて嫌なり、牛乳配達は朝が早すくて辛し、世話する人はあれど露店を張るほどの魂氣もなく鞭韃する人はあれど苦學するほどの勇氣なく、親兄弟に見放され親類緣者に突き出され、進退こゝに谷りて喰ふに喰はれぬ苦しまぎれ、ろくでもない面を磨いて浮世の役にも立たぬ小器用を自己まで忽れ込んでの業、第一の目的は女に近づき得らるゝといふ淺ましさ、生涯そのまま舞臺の役は付かずとも、人知れぬ内々の稼ぎは浮氣女を釣り寄せて男地獄となれば本人こゝに大願成就、もはや人間萬事この外の希望なしといふ奴なり、

その男地獄を我身の大願成就としながら、いかな浮氣の下司女さへ流石に恐れて遁げ出せば、あはれや三年以來、いまだ曾て一人も釣り寄せられしものもない色男、そも〳〵八軒長屋へ舞ひ込ンで巣を構へしには何の神算鬼謀あッてか、戸籍面に本名ある筈なれど藝名は花野露雄、一種異樣の態度に黄色の聲を放ッて長屋中を驚かしぬ、わけて鄰屋の朝鮮髯、壁一重に馴れ〳〵しく聲をかけられぬ、

「お隣屋、在らッしやるかな」

「居りますがね、少々、今日は氣分が惡くッて、いけませンよ」

「御病氣ですか、そりやァお困りだ、どういふ工合に惡いンです、實ア醫者の立關に居ッた事もありますよ、ちよいと診てあげませう」

「いえ何それに、及びませンよ、時に貴君ア、俳優ださうですね」

「はゝゝゝあまり好まないンですがね、素人には惜しいとか勿體ないとか何とか無理無體に引ッ込まれて、已むを得ずね、當分まア遊び半分の洒落ですが、出る毎に役が付くので困りますよ、この分ぢやァ迚も急に遁げ出せますまいよ、はゝゝゝ」

朝鮮髯そのまゝ恐れて、ぐうともいはず、すうともいはず、息を殺して片隅へ縮みあがりぬ、

苟くも身を劇界に置いて、美の上に活動すべき俳優を業とし、その名は花野露雄、今年こゝに二十四の色白といへば、まさか世間の想像これほどの奴とは思はねど、實は世にも人にも捨てられて自己一身の置きどころもない無宿が、幸ひ野倒死の不運を免れて區役所の借埋葬にも逢はず、ろくでもない生面の雜作を摺り磨いて恥を恥と思はねば恥かいたる凡例なく、第一の目的は女に近づいて男地獄となれば生涯の大願成就、もはや他に希望なしといふ淺ましい奴、これまで演ぜし第一の技藝は山國の田舍

芝居を打ち廻りし時、無言のまゝ花道より立出でて舞臺の上手へ啞の如く這入りし巡査が三年以來の大役、この東京では見物に對うて面出す事を無期限に禁じられ、たゞ樂屋で中俳優のため化粧前の水汲と共同の小使にコキ使はるゝばかりの奴、あけても暮れても他の殘物を喰ひ錢の出ぬ酒を飲みたがり、動もすれば内々そッと衣裳を着倒して白晝の下に業を曝し歩き、隙さへあれば小道具の煙草まで盜んで獅子ッ鼻の洞穴より吹き出しながら、薄ッぺらの上唇に反ッ齒を押包んで狒々の如き笑ひ聲、天生の顔と藝とに我身を攻められて今更ら退くに退かれぬとは、此奴いよ〳〵生かして置いて此まゝ濟度の出來ぬ奴なり、

この難物が八軒長屋の入口に巣を構へて、案に違はず最初の衣類とは一切がらりと變りし風俗、油壺より引摺り出せしかと思はるゝ綿風通の古袷一枚、元來これが自己の持衣裳に一種の惡臭を放ち、いかなる狂言の使ひ捨を貰ひ受けしか、更紗形の二重に

足らぬ木綿帶を左の横合に寛く結んで、をり〳〵歸るばかりと吐した奴が此ごろの朝夕てか〳〵と面のみ光らして絶えず表障子の破れ穴より差覗きながら、檻に投げ込まれし色狂氣の如く、人の跫音さへすれば俄に呼び止めて氣恥づかしくも無く、どこの娘に追ひ廻されたの、いや彼處の後家が蒼蠅いのと、的もない女沙汰に自己ばかりの一人決定、これが此奴の疾病なり、

いかな化物が舞ひ込むとも、實は負けず劣らず友喰ひの八軒長屋、容易に驚かぬ筈ながら、此奴ばかりには一蓮托生いづれも聊か惱まされて、壁一重鄰屋の朝鮮髯は固より向ふ二軒の石作も西川も果は恐れて近寄り得ず、彼お虎婆さへ呆れ返ッて皺面を反けながら、うか〳〵相手になれないと持て餘すほどの體、たゞ例の熊公のみは朝早く飛び出して夜遲く歸るがため、まだ此奴の毒氣にも中てられず、幸ひ無事に笑ッて相變らずの氣焰萬丈、

「何のこッたい、つまらねエ、長屋中の估券が下るぜ、あンな青二歳に好きな熱を吹かして堪るけエ、あすの朝の出がけに乃公が一番、やッつけてくれべい」

「おッ近ごろ來なすッた俳優さンへ、もう起きなすッたかね、一軒置いて鄰屋の熊といふ辻待の轅棒野郎でさァ、ちよいと今朝ァ急がねエからな、出がけに色男の御面相、とッくり見直してエと思ッてるンだ、ついでに世間の娘ッ子や後家や騒がれるといふ迷惑筋の恐悅談でも聞きてエもンだ、この面で四十二の厄年と來ちやァ人間萬事、塞翁の馬の糞も拾へねエからね、せめて他の色戀で氣を晴らしてエよ、はゝゝゝ」

例の熊さン例の一本調子に大聲あげて喚き立つれば、長屋中いづれも耳を欹てゝ、こいつ面白いと手を打鳴らす中に、わけて鄰屋の朝鮮髯、ぬッと痩せこけたる面を差出

しながら額越の小聲、

「大將、たのむぜ、長屋中の人助けだ、この化物が引ッ越して以來、何だか妙に氣分が悪くッて堪らないよ、二度と再び毒氣を吹き出さないやう、ぎゆうと咽喉ッ首を占めて貫ひたい、しかし熊さン、よほど手嚴しく遣らないと通じないぜ、石佛の胸倉だからね」

「宜いよ、默ッてろい」

「名は花野露雄といふンだよ」

「うるせエな、默ッてろッてば」

この長屋中に雨戸一枚もなければ、たゞ表障子一重の外に熊公いよ〳〵勢ひ込んでの大聲を張り上げぬ、

「おい俳優さン、何とか言ッたね、む、花だ、花野だ、花野さン、もう夙つくに九時

を過ぎたぜ、どンな花でも露の持てねェ時刻だよ、起きなせェ、用が無くッても一蓮托生の長屋だァ近所合壁の手前といふものがあらァね」

いかな寢恍助も九尺一間の塒、加之も障子越の外より吐鳴り付けられて、はッと驚き、ぴよこりと鎌首を持ち上げながら、手を伸ばして表障子を引き開けし花野露雄、いつの間に運び込みしやら、見れば追込場の破座蒲團三枚を置き竝べて下に敷き、これも同じ穴より引摺り出せし赤毛布の色褪めし一枚を上に被り、例の垢染みし綿風通の古袷を丁寧に疊んで枕頭へ差置きつゝ、自己は丸裸に越中褌のまゝ狼狽へて這ひ出でし體、嘘にも俳優と稱して此奴が女の事を兎や角いふかと思へば、流石の熊さンも呆れて暫し無言に打守りぬ、

されど本人どこまでも天晴れ花形俳優の心意氣、加之も女沙汰に追ひ廻されて今この長屋に身を忍ぶといふ體、せめて顔色でも黑ければ目にも立つまじきに、血の氣もな

い眞ッ白の面を摺り磨いて、いよ〳〵猿眼と獅子ッ鼻と狐面の反ッ齒に見苦しく際立ちし奴、熊公の顔を見るや否、吐す事が猶更ら罪の深い奴なり、

「やァ寢過ぎた、うッかり寢過ぎて仕舞ッた、よほど起された工合ですな、はゝゝ實は前夜、ちよいと出ると運わるくね、久しく遁げて居た女に取ッ捉ッてさ、それがため心にもない疲勞で、やう〳〵一時過に生命からぐ〳〵切り拔けたといふ始末、はゝゝ、さァ這入ッて下さいよ、きけば何ですッてね、俥を曳いてなさるさうだが、これ幸ひだ、をり〳〵乘りませう、なァに私の行く先が先だからね隨分、爲になるさ、辻待の拾ひ客で一日の汗水になるよりやァ、骨が折れなくッて實入が宜い筈だ、はゝゝゝ」

脚下より唐突の不意打を喰ひし熊公、あまりの癇癪玉に物も得いはず、たゞ目ばかり剝いて泡を吹きぬ、

「こン畜生、こン畜生」

色狂者の青二歳と高を括ッて寢込を押へ込み、この馬の脚めと思ひの外、自己が脚下より反對の不意打を喰ひし熊公、をり〳〵俥にも乘ッてやらうといはれて猶更の癇癪玉、むら〳〵と腦天まで突き上げね、

「やい〳〵やい、ふざけるな此へッぽこ野郎め、さァ乃公ァ承知しても料簡の蟲が治まらねエぞ、うねァ全體この長屋へ何のために舞ひ込ンで來やァがッた、二錢五厘づつの日掛で月に七十五錢を出しやァ大屋の手前、どンな奴が來たッて差支なからうが一棟の軒を竝べて近所合壁、一蓮托生の長屋にやァ自然に長屋の作法といふものがあるンだ、も一度その反ッ齒から今の音を吹いて見ろ、何だと、久しぶりの女に取ッ捉ッた前夜の疲勞で今朝ァ寢過した、よく起きて坐ッて目を開いて滿足に吐したよ、いくら無面目に生づう〳〵しくッても人間の皮ァ被ッてる以上、腹の底

で少しやァ氣恥づかしいと思はねエか、え、おい、また幸ひ俥にも乘ッてやるたァいつ乃公が賴ンだい、ぼろ俥に犬猫の死骸を乘ッけてもな、まだ、浮世の罪が淺くッて四十二の厄年まで無事に來た熊さンだ、汝のやうな色狂者の猿ものを曳いて歩くほどの耄碌ァしねエぞ、しよびき出して張り挫く奴だが、それも面倒だから申し聞けるンだ、以後一切二度と再び色の女のと小いやらしい事を吐して見ろ、全體また女護が島へ吹き流されたにしろ、ろくでもねエその洒ッ面で、第一その氣觸な天生でさ、はゝゝよせよ、つまらねエ、無效だぜ、も少し人體に相應した謀反氣を出すもンだ、そも〳〵俳優になるからして物が間違ッてらァ、あンまり緣が遠過ぎて疑はしいよ、眞實に汝、俳優かね、錢を取ッた見物の前で舞臺の藝をする俳優かね」

奈何せん女の事實に付いては悲しや由來こゝに未だ曾て一人の證據を出し兼ねれど、

俳優かと念を押されしが花野露雄その身に取ッて生涯の無念この上もない顔色、じろりと額越に睨みあげて身を斜めに構へながら、變な調子に兩の拳を握り詰めし體、なるほど流石に何處やら演劇らしく、加之も言葉まで俄に白めいたり、

「や、なゝ何といふ、鑑札ァ生憎ゝ先生の手許にあッて今こゝでの證據は無いけれど、この花野露雄が俳優でなくば其他に何と見える」

鑑札よりも時に取ッての現在、爭へぬ技藝の上に示したる筈なれど、もはや言ふだけ言うて溜飯を下げし熊さン、平氣の鼻唄に冷かしながら、せゝら笑ひぬ、

「まァ宜いや、ね、ぢやァ俳優として置かうよ、はゝゝゝしかし俳優さン、いくら狂言でも何でも物には程度のあるもンだ、のべつ幕なしに人の面ァ見て方圖のねェ色戀の狂氣沙汰ァ止して貰はうぜ、この長屋ァ汝一人が借り切ッたンでもあるめエからな、おとなしくしなせエ、あたり近處が迷惑だ、汝に好きな熱を吹かれちやァ、

長屋中に住ンでるもンの總齒が一時に浮き出さァね、はゝゝゝゝおい隣屋の八卦屋向ふの千三屋に九州の金山さン、みンな安心するが宜いぜ、今この俳優に乃公が委しく組合の規則を言ッて聞かしたからね、はゝゝゝゝゝ」

きくや否、いづれも一時に面を出して、笑ひながら手を拍ち叩きぬ、

「御苦勞々々々、それで助かッたよ、もう毒氣に中てられる恐れは無からう、長屋の天下泰平だ、はゝゝゝ」

されど花野露雄が心中なか〳〵泰平無事でなし、おのれ今に見よ、目の覺めるやうな女を引摺り込んで此奴等の膽魂を抉ッてくれンとの覺悟なり、

例の熊公がために的なしの色狂者と吐鳴り付けられ、その面で俳優かと念を押され、長屋中より手を拍ッて笑はれし花野露雄、人間第一の目的を女とする身に取ッては生

涯の無念、此上もない恥辱、おのれ今に見よとの一心さても怖ろしや、此奴そも〳〵どこで如何なる女を探し當てゝ引摺り込みしか、夜更け人定まりし後、壁一重の朝鮮髪が寢耳へ洩れ來る癡話口説、加之も不思議に女は死ぬの生きるのといふ半泣きの體なり、

不意に夜中の夢を破られし朝鮮髪、はッと驚いて鎌首を擡げながら、耳を欹つれば女の泣聲いよ〳〵激しく、今しも男の胸倉へ武者振り付いたるが如し、

「口惜しいッ」

「おい、おい、さう手荒な事を、のゝ喉咽が、あゝ苦しい、お放しよ、放せッてば」

「いゝえ妾、放しませンよ、これほどに思ッてる妾を、こゝまで妾に苦勞さして貴君ァ、それで濟むンですか、さァ花野さん、どういふ理由で妾を欺して、こンなところへ遁げ込んだンです、そりやァ貴君のこッてすから、いくらでも外に蒼蠅いほど

女は出來ませうが、妾こそ貴君のため親にも兄弟にも捨てられて仕舞ッて、世間の人へ顔が合されないンですからね、かうして貴君を見付け出した以上、もう死ンでも宜いの、しかし一人では死にませンよ、前世の約束だと諦めて下さい」

「まァ、放せよ、兎も角こゝを、おい、放せといふに」

「放しますから、貴君、きッと、妾の、妾の今、言ッた事を」

「きくよ、きくよ」

「さァ放しましたよ、さァ貴君、どうして下さる」

「だがね、さう人間の生命を、さう安くさ、つまらないぢやァないか」

「なァに安くッても高くッても構ひませンの、かうなれば妾、どうせ夢中ですからね」

「いくら其方が夢中でも、まだ浮世に用のある此方は少々、恐れるよ」

「おや、また、貴君、そンな事を、現在、今、きッと妾のいふ事を聞くと、言ッたぢ

やありませンか、全體この夢中に誰がしたンです、どこの誰がため妾、こゝまで夢中になッたンです、事の原因は貴君ですよ、思ひ込まれた因果で仕方がないと諦めて、花野さン、お氣の毒ですが覺悟して下さい、妾のやうなもンと心中するのは、定めて嫌でせうが、これまで貴君、何十人といふ世間の女を、さンざ迷はして來た應報ですよ」

「や、さう、いはれて見ると一言もないがね、かはいさうに今年まだ二十四だよ、和女だッて二十五で、やう〳〵蕾が開いたばかりの花ぢやァないか」

「あれ、妙に今更、あらためて年齢の事を言ひ出しなさるのね、なるほど妾は二十五ですよ、貴君ァ二十四で、男より女の方が一歳の上だから、それが不足ですの、それがため貴君、妾と心中が出來ないンですか」

「いゝやさ、困るなァ」

「どうせ貴君、お困りでせうさ、しかし花野さン、自業自得で、女に生命がけて惚れ込まれるように出來たのが貴君の不運ですよ」

「いよ〳〵困るなァ、どうしたら宜からう、退くにやァ退かれずさ」

壁一重を隔てゝ耳を欹てながら、始終の樣子を聞き取りし朝鮮髯もはや堪らず、がたがた打顫ふ手足に力を込めて息を殺しつゝそッと其まゝ這ひ出しぬ、

長屋中、まだ寢ぬ宵のうちこそ豆ランプの灯影は射せど、いざ寢入れば何處に一點の火の氣もない眞暗闇、加之も雨戸はなし表障子一枚づつの軒並びに例の朝鮮髯、そッと自己が塒を脱け出しつゝ隣屋の熊公が枕頭へ這ひ込むや否、聲を潜めて搖り起しぬ、

「たゝ大變た、大變だ熊さン大變だ」

終日の疲勞に前後も知らず寢入りし熊公、はッと飛び上りぬ、

「何だ何だ、火事か、どこだ」

「火事ぢやァないよ、熊さン、大變々々心中だ、長屋に心中が出來たよ」
「えッ、心中、誰だ」
女房お菊も目を覺しながら、相手が相手と高を括ッて落着いたる體、
「良人さン、さう慌てなくッても八卦よい屋だよ、何だッて今ごろ人を、馬鹿々々しい、夢でも見損ッて戸まどひしに來たンだらう、氣の付くやうに腦天の一打も喰はしておやりよ」
「やッ、危い、熊さン、むやみに遣ッちやァ困るよ氣は確だ、眞實だ、心中だ、細君夢でも嘘でもない現在、隣屋だ、隣屋の俳優だ、いよ〳〵今やるらしいぜ」
「何、俳優、あの色狂氣ぢやァねェか、それこそ寢恍けて囈言を吐してるンだらう、なァ嗅ァ」
「さうだよ、あンな氣觸な奴に心中の相手が出來て堪るもンかね」

「ところが、さうでないよ、正しく心中の相手になる女があるから不思議だ、さも口惜しさうな半泣きで野郎の胸倉へ武者振り付いてね、さンざ癡話口說の果が大變、いよ〳〵心中といふ間際まで押し詰めたンだ、加之も始終の成行を委しう壁越で、手に取るやうに聞いて來たンだから熊さン確實だよ、いくら何でも捨てちやァ置けないさ、萬一この幸運齋、薄ッ氣味が惡くッて居堪らないよ、早く熊さン、早く早く、あンな奴でも人間一疋の生命だ、いや二疋だ、兎も角まッ闇ぢやァ仕方がない細君、マッチ〳〵」
あまりの事に今は夫婦も驚いて、マッチの火を豆ランプに點せば、痩せこけたる額に冷汗を流して顏色まで變へし朝鮮髯、
「たのむよ熊さン、早くさ」
「ぢやァ眞實だね」

「眞實で無くッてさ、わざ〳〵誰が夜の夜半に慌てゝ來るもンかね」
「むゝ待てよ、こいつァ少々、乃公も何だか薄ッ氣味が善くないぜ、現に一昨日あゝいふ工合にコキ卸してやッたンだからな、その面當半分に女を引摺り込ンで、もし無理心中でも、や、どッこい、考へもンだ、うか〳〵飛び出せねェよ」
「良人さン、關係が面倒だから、默ッて出ない方が宜いよ、あゝいふ奴は得て死際の惡いもンだからね、苦しまぎれに轉輾うち廻ッて、どンな事をするかも知れいさ、全體この八卦屋も八卦屋だ、ろくな事を持ち込ンで來ないよ、いくら何と言ッても良人は出さないンだからね、もし近處合壁の義理なら壁一重隣屋で流れ込ンだ血糊にでも踏み辷ッてから吐鳴り出すが宜い、それまでは知らないよ、薄情なやうでも良人は今年四十二の厄年だよ、さァ八卦屋さン出て往ッて貰はう」
朝鮮髯、ごそ〳〵と片隅へ這ひ込みぬ、

「熊さン後生だ、こゝに暫時このまゝ置いて貰ひたい」
壁一重の心中沙汰に驚いて熊公の枕頭へ遁げ込みし朝鮮髯、そのまゝ顏色を變へて片隅に身を縮めしが、ぼッと白く夜の明けかゝるや否、此奴また俄に痩せッ首を振り立てゝ騷ぎ出しぬ、
「さァ熊さン、夜が明けたよ、あのまゝ捨てゝも置けまいぜ」
「まァ兎も角、見屆けて來るが宜いぢやァねエか」
「さ、その見屆けるに付いてもだ、どうも一人ぢやァ面白くないよ、もう大丈夫、同伴に出て貰ひたい」
「大丈夫なら一人で行けるだらう、乃公だッて人間の生命に關はると聞いちやァ、なァに嗅アが止めたぐれエで止まる男でも無しよ、また例の罵倒があるにしろ、なに汝、そンな事で二の足を踏む熊さンでもねエがね、どういふもンか不思議に彼奴

ばかりやァ薄ッ氣味が悪くッて飛び出す勢ひが出なかッたよ、その野郎が變な工合で、女を相手に死ンだ醜態ァ猶更ら御免を蒙りてエな、まァ長屋の總出になるまで差控へだ」

「困るよ、この長屋で熊さンが、それぢやァ困るよ」

「困ッても乃公ァ嫌だ、生きて居てせェ何だか妙に蟲の好かねェ奴だからな」

「や、仕方がない、壁一重に隣り合ッた因果だ、向ふの千三か鑛糞でも引ッ張り出してやらう」

夜の明けしを何よりの力に、まづ石作か西川を叩き起さンと、向ふの右側に添うて立出でしが、刃物三昧としては血腥い惡臭もせず、ぶら〳〵首でも吊ッたとすれば、わづか疊三枚の九尺一間に男女の死骸、表障子に當るか觸るかと思ひの外、その影もなし、さては手を引いて飛び出し闇に紛れて大川へでも身を投げしかと、あまりの音な

き體に朝鮮髯そろ〳〵立寄りながら、そッと差覗けば、野郎二人、前後も知らず大の字形に睡りぬ、

朝鮮髯、あッと呆れて、また熊公の許へ馳け込むや否、

「熊さン〳〵」

「どゞどうだ、やッてるかい」

「やッたも、やらないも、まァ熊さン、ちよいと往ッて見るが宜い」

「だからよ、なぜ千三か鑛糞を叩き起さねエンだ」

「いやさ、それに及ばないよ、もう拙者一人で確乎だ、畜生、人を馬鹿にしやァがッて、さァ此まゝぢやァ置かないぞ、誰が何と言ッても幸運齋が承知しない、さァ承知しないぞ」

「全體どうしたンだい、急に目を剝いて跳ねッ返るぢやァねェか」

「跳ねッ返らずに治ッちやァ居られないンだ、女と思ッた相手が熊さン、野郎さ、畜生、加之も心中どころか枕を竝べて好い心持に寢て居やァがるンだ、つまり同じ穴から女形の蒲ッ屑でも引ッ張ッて來て壁越の一狂言、うまく欺しやァがッたンだよ、夜の明けないうちに相手の奴を追ひ歸した後で、や、前夜は實に、とか何とか吐す筈が、はゝゝゝ狸め、勞れて寢過ぎた正體に相違なしの中央だ、熊さン、どうしてやらう、腹が立ッて堪らない、生れて以來こンな癪に觸ッた事アないンだ、だしぬけに水でもぶッかけてやりたいよ」

流石の熊公夫婦も目と口と開いたまゝ、笑ひも得せず怒りも得せず、ぽッと曉方の呆れ顔、舐められたるが如し、

その愚には及ぶべからざる世の諺、こゝまで白癡の骨頂を盡しても、さて女といふものゝ片相手に見られたいか、的なしの色狂氣といはれし口惜しまぎれに、同じ恥知らずの穴より女形の蒲ッ屑を引連れ來りて、壁越の一狂言に心中沙汰の癡話口說、まんまと首尾よく鄰屋の朝鮮髯を驚かせしが、思はず勞れて其まゝ寢込みし花野露雄、ふと目を覺せば既に夜が明けたり、

「おい、おい〳〵大變だ、夜が明けたぜ、今のうちだ、そッと、早くよ靜に、そッと、そッと」

「や、南無三、寢過したぞ」

「心中しに來た女が、さう寢過しちやァ困るよ、長屋の奴等に目ッけられないうち、さァ早く、いづれ今夜、此方から出かけるよ」

「待ッてるぜ、しかし前夜の役ア少々、骨が折れたよ、いくら安くッても天どン一杯、確實だらうな」

「奢るよ、きッと奢るから早く、油斷大敵だ」
「おッと承知、よし來た」
いづれ此奴の片相手に呼ばれて來るほどの奴、こそりと立出でて鯉の如く前後を見廻しながら、足音を忍ばせつゝ今しも長屋の入口を飛び出さんとするや否、外に待ち受けし朝鮮髯、ぬッと不意に現はれて其奴の胸倉へ喰ひ付きぬ、
「さァこの野郎、よくも人を馬鹿にしやァがッた」
「こりやァ失敬な、何が人を、全體どうするンです」
「どうも斯うもあるか、心中するならして見ろ、無事は歸さないぞ、今度ァ長屋中あらためて總見物だ」
「えッ」
「やァ熊さン、此奴だ〳〵」

聲に應じて飛び出せし熊公、朝鮮髯に代ッて其奴の胸倉を摑みながら、ずる〳〵と長屋のうちへ引摺り込みぬ、
「はゝァこの狸だな、夜の夜半に女の聲色なンか使やァがッたのは、道理で人間の面アして居ねェが、ふざけた眞似をする奴だ、やい、よく聞けェ、うぬ等の狂言に乘ッて手盛を食ふ長屋ぢやァねェぞ、さァ覺悟しろ、あの色狂者と一個に縛ッて大川へ叩ッ込むから」
「まゝ眞平、御免ください、決して、さういふ理由では、たゞ頼まれましたので、いや實は下稽古の相手になッたばかりですから」
「何、何だ、稽古だァ、べらぼうめ、いくら白晝の舞臺に出られねェ奴でも、人の寢靜まッた夜の夜中に心中の稽古する奴があるけェ」
怨恨骨髓に徹せし朝鮮髯、こゝぞと一所懸命の聲を張り上げて叫びぬ、

「大變だ〳〵、心中だ〳〵」

出るにも出られぬ花野露雄、九尺一間の一方口に遁場もなく、破れ疊三枚の上に身の置きどころもなく、ぐる〳〵と這ひ廻りし果は片隅の吊戸棚に搔き上ッて、猿の如く面のみ差出しながら戸外の樣子を窺ひぬ、

一合の桝に二合の酒も水も盛れず、人間相應に白癡を盡せし花野露雄が心中沙汰は、その曉に長屋中の嘲笑となりて、三尺の吊戸棚より引摺り下されし上、いよ〳〵一札の謝罪證文を差出しぬ、

加之も文句の指圖役は前夜以來の本氣に怒り出して今朝まだ笑顔を見せぬ朝鮮髯、今更ら面目次第もない頭と共に書手は本人の色狂者、その一札を確と請取り正に預かり置くものは無筆の熊公なり、

あやまり入候一札

私事身分の程も顧みずお長屋の諸君方に對してガラにも無之色男となりたき一心より不圖惡心增長致し內々同類の怪しき者を語らひ候上不心得千萬にも深夜男女の聲色を使ひサンザ癡話口說の段取を聞えさせ全く心中でも致し候やうにケシカラン眞似を仕り候處其曉方に露顯致し候事其罪甚だ以て輕からざる儀と申譯なき次第重々奉恐入候就ては今後一切かやうの馬鹿らしき失禮は決して致すまじく且又いかなる場合に立至り候共ウッカリ女の事は口より出すまじく寢言にも申すまじく候間何卒特別の儀を以て今度の一條大目に御見遁し被下度奉願上候故あやまり證文一札爲後日仍而如件恐惶謹言頓首再拜伏て申上候也以上

別而お鄰屋の幸運齋先生樣に對し奉りて頗る甚だ以て此上もなく恐縮千萬

至極に奉存候事也

長屋中諸君様方御中

この八軒長屋の寶物ともなるべき天晴れ名文の謝罪狀一通、熊公の手に納りて後は、流石の色狂者も聊か熱の冷めし體、さらぬも元來の小男いよ〳〵小さくなりて身を縮めながら、そのまゝ恥を忍んで飛び出しも得せぬは、よく〳〵この長屋の外に身の置きどころもない奴、もはや劇場の火の番にも使はれぬ俳優殿なり。

それに引代へて例の朝鮮髯は滿面の得意、ぐッと一時に溜飲を下げし心地、なけ無しの鼻を高くしながら、痩せこけたる肩を怒らして饒舌り立てぬ、

「どうですい石作さン、あの謝罪證文あれで宜うがせうね、文言に就いて彼是ないで

せうな、はゝゝゝ」

「いや、うまいもンだ、實に感心しましたよ、流石ア君だ、ね、平生は別段これといふ目立ッた事もないやうだが、偖、あゝいふ場合に立至ると長屋中、あれだけの文句を何の苦もなく、すら〳〵と出すものア無いよ」

「はゝゝゝ色狂者、ぎゆうの音も出ないところが呵しいよ、なアに石作さン、まだ文言は幾何もあるがね、まづ事の分るのが專一だから、あの邊にして置いたのさ、加之も一行の中で半分も字を知らないといふ厄介な奴だから、いち〳〵手を取らンばかりに教へてやッた面倒さ、實に閉口したね、馬鹿々々しい、夜半の壁越に驚かされて曉方の謝罪證文まで教へて遣りやア澤山だ、はゝゝゝ」

「何かの因緣だらう」

「眞平だ、あンな奴に何かの因緣が繫がれて堪るもンか、時に石作さン、いつの間に

か十月も過ぎて仕舞ッて、もうこれ霜月だ、いよ〳〵來月は師走ですぜ、ぼンやりして居れないよ」

「眞實だ、どうせ世の中と同伴に歩けない覺悟で、いくら暢氣に構へ込ンでも年の瀬といふ奴ァ、ふしぎに人を騷がすもンだからな、うか〳〵油斷が出來ないよ、嘘は吐く是から餅を搗くばかり、といふ川柳は八卦屋さン、まだ浮世に希望のある人間だ、かうなッちやァ、お互に借金方へ嘘を吐く苦勞もないが、あとで搗く餅の工面もないから悼ましいよねェ、はゝゝゝ」

「や、しかし石作さン、まだ四十日の餘もあるから、日に一錢づつの用意しても五十錢に近いよ、伸し餅の一枚ぐらゐ買へるだらうさ」

「その日に一錢づつが大役だ、兎も角も何か喰ッて生き伸びた上の一錢づつだからな覺束ないぜ」

「なるほど、うッかりしたよ、喰ッて上の一錢だな、はゝゝゝ」

定めなき世の中の總勘定、いづれ來るものと知りながら、さても一年中の大油斷こゝに押寄せ來りて、いよ〳〵免れぬ年の瀬の大晦日となれば、俄の脚下より立つ鳥の羽音に驚いて落つる平家の昔に等しい大混亂、まさか首は取られまいといふ其首さへ、うか〳〵すれば取りに來る奴がありさうなり、

されど物の遣取は世間普通の事、この八軒長屋に一升の米も麥も貸すもの無ければ一日の味噌醤油も借るだけの力ある奴なく、結句の幸ひ寧ろ却ッて安樂の別世界と思ひの外、やはり貧乏神の隙ゆく駒に驚かされて、あッと今更ら尻餅は搗けど、のし餅の一枚も買へぬ人間煩惱の四苦八苦に惱まされつゝ、ぎッしり首も廻らず手足も出せぬ九尺一間の塒に泣く音を洩らしぬ、

口は減らねども次第に年は増えて行く浮世の業突張、お虎婆ァは蜜柑函を横に炭團一個の抱火鉢、表障子の破れ目より吹き込む寒風に、さらぬも皺くちやの満面を皺めながら、誰にいふともない獨言、

「さァ、いよ〳〵一年また御無事にお濟まし遊ばしたよ、ちよッ、あすの朝ァ六十六だ、生きて居たくもないが殺し手も無きやァ首も吊れまいさ、お〻寒い、いやに空ッ風ばかり吹ッ込むよ、畜生め今日ァ世間で金の遣取する日だ、この風に一圓紙幣の一枚ぐらゐ舞ひ込ンで來さうなもンだなァ」

その鄰屋は廂髪の古巣まだ其ま〻の空屋を置いて、三軒目は例の十千萬圓に浮かさる西川要五郎、鷹が飛べば糞蠅も飛ぶ勢ひに空を睨んで、相變らず九州の金山、さて久しいものなり、

「まづ面白くない今年も今日で最終だ、一陽來復、あらためて來年こそ、腕に糾をか

けて金山を一番、どうか物にしてくれよう、いつまで如是ぢやァ堪らない、なァに男ァ裸百貫、覺悟次第で天にも上りやァ地にも落ちるさ」

その鄰屋は千三屋の石作、あけても暮れても飛び歩いた今年中の彼是は只こゝに飢死を免れしだけの事、されど此奴また此奴相應の野心滿々たり、

「考へて見ると乃公も隨分、なが〳〵と久しい間の御辛抱、思ひ切ッた落魄やうで、餅のない歳の暮か七年も打ち續いたから、もう宜からう、いかな執念深い貧乏神だッて少しやァ根氣が盡きたらうよ、そろ〳〵この石作に飽いた筈だ、しかも物事は總て七年を浮き沈みの境界とするから、や、有難い、來る春は賴もしいぞ、遲くとも櫻の咲く頃までに此長屋を立退いて、どッか人間らしい市中で藏の一戸前もある家を當分まづ借屋でも堪忍するさ、そのうちには居ぬきのまゝ買ひ取ッて、あまり遠くもない格安の地面あれば遁さず、それも此方の物にして仕舞ッて、はゝゝゝ驚

くだらうよ、一二年の後には懐手のまゝ顎で物いふ地主様だ、その時こそ、この乃公を雲摑みの彼是屋だの、いや川底の千三屋だのと吐した奴等の御面相が、今から眼に見えるやうだ、はゝゝゝかう考へて見ると偖、よし工面が出來るにしても今年の餅を喰へないぞ、うか〳〵人にも貰へないよ、これで七年目の厄拂ひだ」

その向ふ側は色狂者の狂言にも盡き果てた花野露雄と八卦よい屋の幸運齋、まさか貸した金を取りに出かけたでもあるまいに、どうした事やら今日の大晦日に二軒うち揃うて朝よりの不在、その軒並びは例の熊公夫婦、こゝは一入また面白き浮世の御難場なり、

お虎婆も、鑛糞も千三屋も色狂者も八卦よい屋も、皆これ九尺一間に膝小僧抱き寢の境涯、たとひ天井を仰いで笑へばとて緣の下に伏して泣けばとて、自己たゞ一人の顏藝で濟む筈、生きても死んでも浮世の差引さらに何の損益なし、

されど例の熊公のみは幸か不幸か破鍋に閉蓋の緣あッて、浮ぶも沈むも今更ら捨てられぬ女房持の身體、さうはして居れぬ今年の大晦日ながら、どうも出來ぬ今日の切迫に自棄の大の字形、

「おい嚊ア、仕方がねェ、潔く諦めろい、今更ら惡びれたッて同じこッた、折角こゝまで深い馴染を重ねて來た貧乏神だよ、いくら夫婦が喧嘩腰になッて叩き出す氣でも、先様は御承知なさらねェ、さう急に出て往ッてくれねェからな、いッそ此まゝ相變らず交情よくして、貧乏神と同棲に年を送らうぢやアねェか」

「何だねェ、まだ良人さン、そンな氣樂な事を言ッてるよ、今日は大晦日だにさ、あすは元日だよ」

「不思議は無エさ、月日は正直よ、いづこの里も世間一體だ、しかし遣取の面倒がねエだけ汝、有難く出來てるンだぜ、えゝおい、千兩の金を睨ンで腕を組ンだり首を

捻ッたりしてさ、帶に短かし襷に長エ苦勞をするよりやァ、いくら幸福か知れねエぜ、世の中には一萬圓の金を脚下に積ンで首を吊る奴のあるのも今日だ、有難エ有難エ」

「だッて良人さン、いくら何でも一年の最終だよ、來年の浮世最始だよ、せめて、の餅の一枚ぐらゐ、どうかしたいさ、ねエ同じ人間だから」

「愚癡ッぽく吼えるない、きのふ稼いで來た錢があるぢやァねエか、まだ米の一升や一升五合は買へる筈だ、大晦日だッて元日だッて生命に別條が無きやァ人間この世の恥辱も外聞もねエぞ、のし餅一枚が來年中の飯の代物になるけエ、もし一年一枚で濟むなら三年ぶち込まれる覺悟で今夜、七八枚も盜ンで來てやらァ、どうだい、左衞門の尉」

「困るねエ、良人さンは、うかく物も言へないよ、直接それだから」

「だッて、さうぢやァねエか、乃公ァ汝が十年も氣樂に暮せる事がありやァ、三四年ぐれエ牢に叩ッ込まれても宜いンだからな」

金殿玉樓に鬼の棲む世の中、この九尺一間の破疊に自然の佛あり、嚙んで吐き出すやうに荒々しく喚き立つれど、いふにいはれぬ優しき一言に女房お菊、おもはず顏を反けながら、肌寒き古袷一枚の袖に涙の露、そッと押拭ひぬ、

「ねエ良人さン、なるほど、お米は二升足らず、あれで買へるからね、それを一升にして、あとの一升分で、お酒でも買ッて來ませうかね」

「やい〳〵、默ッてろい、現に今うぬが吼面かいた其、その餅せエ買ッて遣れねエ今日の乃公が酒を、こン畜生、なゝ何を吐しやァがるンだ、はッ飛ばすぞ」

「でもさ、妾、つまらない愚癡を言ッて惡かッたからさ」

「まだ吐しやァがるな、さァ承知しねエぞ、よし、さう吐しやァ乃公も意地だ、今に

見やァがれ」

「あれ、良人さン、どうするンだよ」

「べらぼうめ、今夜ァ世間も徹夜だ、これから氣を變へて稼ぎに出るンたい、のし餅一枚と酒を五合、うぬッ持ッて歸るぞ」

あッて足らぬ浮世の有財餓鬼よりも、無うて足る事を知る今日の我こそと、熊さン大に一種の人生觀より樂天主義を唱へて、そのまゝ悠々と九尺一間の塒に横はりしが、二升の米代を割いて酒を買はんといひし女房の一言に、むくりと跳ね起きつゝ鬼のやうなる目に涙、のし餅一枚のため凍えし轅棒を握ッて、あはれや年の暮の北風に吹かれながら、ぼろ俥を曳き出しぬ、

出て見ればなるほど浮世なりけり、うか〳〵と暮せし一年中の總仕舞、けふ一日は猫

も杓子も飛び出して狼狽へ騒ぎつゝ、遣るか取るかの境を東西南北に馳せ違ふ體、往來は火事場の如く人は織るが如く、中には血眼に敵を覘うて駈け行く奴あり、一方の血路を開いて遁げ廻る奴あり、ぼンやりと氣抜けして的なき方角へ歩む奴あり、そのまゝ夜遁もしかねまじき思案に立停る奴あり、止手さへ無くば今夜の捨鐘を相圖に生命の危き奴あり、いづれ三百六十五日の帳尻に仔細のある奴、仔細なくて來る春を遲しといふ奴は、世の中に用のない馬鹿か抜目のない才物か今更の金錢に關せぬ富貴名門か進退こゝに谷りし自棄貧乏か隱居の爺か婆か無邪氣なる小兒の外は、人間一切だこれ金のために魂魄脱殼の操り人形となりぬ、

されば熊さン、いつにない案外の客を拾うて、晝過ぎより夕暮までに思ひも寄らぬ七十六錢とは近來の大獵、や、こいつ面白いぞ、持つべきものは嗅ァ大明神、よくも愚癡を滾してくれたと、ます〳〵勢ひに乘じて脛を飛ばしつゝ、もはや伸し餅一枚では

承知せぬ體、夜の明けるまでは稼ぎぬく體、この寒中に大汗を流しながら、働けば働くほど不思議に絶えず取ッて、その夜の十一時ごろは一圓八十八錢となりぬ、

五圓紙幣を正直の頭に戴いて以來、一圓八十八錢は今日が始めての熊公、徹夜の大晦日を幸ひ今一息で何の筈もなく二圓と思ひしが、宿には伸し餅たッた一枚を今年の願望に我を待つ嚊アの心、あの古袴を素肌に着せて置いても、偖それには不足もいはぬ女と、俄に轅棒を引戻しぬ、

空俥に大願成就の伸し餅二枚と生涯のうちに一度は苦い茶で甘納豆を飽きるほど食ッて見たいと吐した嚊アの執心、まづ甘納豆半斤に三十目の茶を四半斤、別に鹽鮭二片の皮包みを轅棒に吊しながら、居酒屋の門口に咽喉は鳴れど、まづ本城へ落着いて御臺所を相手の年忘れ、ゆる〳〵大胡坐のまゝ春を迎へんと、兩國の河岸傳ひに厩橋の此方まで來かゝりし頃、淺草より除夜の鐘を撞き出しぬ、

流石に市中とは違うて一軒の小商人もない片側町、兩國より厩橋までの河岸傳ひでは夜半の鐘もろとも猶更ら人の足音なく、たゞ大川を舐めて吹き來る筑波颪の北風、そッと身に沁む寒さに思はず首を縮めて前後を見返れば、ちら〳〵橋の上を往來ふ提灯の灯影、まッ黑の闇水にうつりて火箭を射るが如く物凄し、

をりしも河岸の捨石に腰うちかけながら、闇を流るゝ川水に對うて動かぬ人影、ぼッと提灯の火に通行の熊さン何心なく見れば、痩せたる横顔の面相、どこやら彼の星影先生に似たり、

今年の浮世こゝに一切その最終を告げて、我身も天地間に運命の盡き果てし星影先生、骨ばかりの膝頭に思案の腕を組み上せて、たゞ茫然たる背後より不意に映す灯影もろとも唐突の聲、

「やッ、せゝ先生ッ」

はッと驚いて起ちしが、もはや飢死に間もない身體衰弱、よろ〳〵こして其まゝ倒れし上より、走せ寄ッて抱き起せし熊公の顏を見るや否、先生また今更の驚愕、しきりに漢搔いて遁げ出さんとすれど、あはれや起きて走るだけの力なし、

「じゞ實に、面目次第もない、どうか放して下さい今、こゝで今、この僕は兩度この面皮を見られる筈で無かッたから、寧ろ恩惠だ、たゞ賴む、放して貰ッた方が僕に取ッて」

「なゝ何ですい先生、さう遁げなくッても宜いぢやァありませンか先生、熊でさァね、見られる筈でねエにしろ、かう目ッけた以上ァ放しませンぜ、全體まァ、この押し詰ッた年の暮に闇ン中で今時分、うすッ氣味の惡い、まッ闇な川面に對ッて茫然と何を考へてなさるンですい、兎も角も先生、わッしに隨いて御出でなせエ、長屋ァ外の奴等に嫌でせうから、つい橋の先の居酒屋まで、實ァ今夜、少しぐれエ飲ンで

も宜いンですよ、はゝゝゝ見て下せエ、こりやァ今夜の先生に對して言ふ理由ぢやァねエがね、この熊が生涯の一代記に書いてほしいンだ、今日の大晦日に人並の伸し餅二枚を俥に積ンでさ、嗅アが年來の希望だ、小苦い茶が四半斤に甘納豆の袋入が半斤、轅棒の先に鹽鮭二片ぶら下げて、まだ先生かういふ音がするンでさァね、がちやゝ〳〵、どうですい、六七貫は無事に殘ッてますぜ、御安心なせエ」

星影先生、いよ〳〵恥ぢて身の置き場所もなく、またもや元の捨石に腰うちかけながら顏も得あげず差俯いて聲を顫はしぬ、

「いや、芳志は實に有難い、これまでの僕と違ッて、今日は別人の如き僕だ、その僕が謹ンで感謝します、しかし、僕は不幸でも非運でもない、當然の理に於て今日かうなるべき筈の結果が迫ッて來てるンだから、たゞ感謝するのみに止めて貰ひたい、もはや僕は社會に存在する資格も人に慈惠を受ける餘地も無くなッて仕舞ッた、こ

のまゝ見捨てゝ置かれるのが却ッて僕のために自然の數だ、あゝ天を怨まず他を恨まず只こゝに我みづから我を憫笑するのみで、譬ひ一時、助けられても到底その效果のない僕だ、この無用物に空しく時を費して折角の汗水に得たものを割くよりは、少しも早く歸ッて、實に尊敬すべき其、それこそ眞實の神聖物だ、その清き美はしい物を彼、羨むべき淑德の細君に捧げて下さい、凡そ男女の愛といふ上に於て最も慘澹、最も殘忍酷薄なる實際に遭遇した僕が、悔悟の念と共に大に決心した今、ここで事實かくの如き愛の美果を最も感謝すべき知人を現在に認め得たのは、せめての幸福だ、正しく神の示し給ふ教訓であらう」

「だから先生、いけねエよ、さうなッて居て、まだ暢氣に、そンな分らねエ講釋を始めるから物が間違ッて來るさ、とゝ兎も角こゝぢやア仕方がねエ、面倒だ、お乘ンなせエ、ちよいと餅を膝に乘ッけてね、同じこッたよ、はゝゝゝ」

淺草より撞き出す除夜の撞の音に、時も今年と來年の境目、闇を流るゝ筑波颪の川水に對うて、人も現世と未來の境目、その星影先生の危き袖を片手に掴みつゝ、片手に俥の轅棒を握りながら、厩橋と吾妻橋の中間を右に折れし横町の居酒屋、いづれ今夜は徹夜の體なり、

俥は其まゝ門口に捨て置けど、大願成就の伸し餅と嗅アへの土產は運び込ンで、幸ひに鹽鮭を宙に吊しながらの大聲、

「あッ、面倒だがね、ちよいと火にかけてくンな、そして何か外に煮たもンでもありやア、見繕ッて飯と酒だ」

繩暖簾のレースに一時の浮世を隔てゝ、空樽の椅子に長板のテーブル、御持參の鹽鮭に煮豆と燒豆腐の獻立、盛飯と熱燗の德利を前後に竝べて、まだ茫然たる星影先生に差對ひし熊公、さて斯うなれば箭でも鐵砲でも持ッて來いといふ勢ひなり、

「さァ先生、談話ァ後だ、兎も角も喰ッて下せェ、わッしやァ酒だ、しかし一盃どうですい、え、お好きでもねェが、こンな時こそ何とか言ひましたッけ、むゝさうよ憂を拂ふ玉箒だ、乙な事を知ッてるでせう、はゝゝゝな、何故、なぜ先生、食ッて下さらねエンだ、無理に引ッ張ッて來たのが、お氣にでも觸ッたンですか」

「いや、どうして、決して、なか〳〵、さういふ理由では無いが、しかし、實に慚愧の至極だ、いかに鐵面皮でも、顔を上げて居れない」

「先生、目を開いて見て下せェ、こゝに居るなァ熊の野郎ですぜ、顔を上げるの下げるのッて、馬鹿々々しい、そンな理窟も絲瓜もねェぢやァありませンか」

「さ、そこだよ、さう言はれるほど猶更ら心に恥ぢて、ます〳〵堪へられない、寧ろ苦しい」

「はゝゝ先生、例の一件を氣にして、この熊に面目ねェとか何とか、つまらねェ事を

考へて居なさるンだな、ぢやァ、いッそ此方から手ッ取早く叩き割ッて、無遠慮に出かけませうよ、はゝゝゝ時に先生、あの廂髪ァ其後、どうしましたい、實ァお手紙を持ッて來た屑屋の後から三輪新町の木賃宿まで、内々そッと往ッて見たンですぜ、ところが、驚きましたね、あンまりだァ先生、いくらなンだッて、まさかと思ッた例の廂髪が、ぬッと出た姿を一目、や、流石の熊も開いた口が塞がらずさ、そのまゝ飛ンで歸ッて、今でこそ話しますが先生、いけねェ、もう無效だ、あれぢやァ仕樣も模樣もねエと、匙を投げて仕舞ッたンですよ、しかし先生が先生で相手の女が女だから、どうせ早いか遲いか、お目の覺める時があるだらうと思ッてね、いつも蔭ながら嗅ァと、お噂をして居ましたのさ、だが今日の今夜、この夜深に先生あンな危ねェ河岸ッ端の闇で、全體、何を考へ込ンて居なすッたンですい、よく出逢ッたこッたよ、第一また神田の本屋さンが附いてる以上、どンな事になッてもさ

食ッたり着たりするぐれエの事ァ、と思ッた先生が現在その襤褸を纏ッて、加之も大變お痩せなすッたぜ、案の定、あの阿魔ッちよ女、とンでもねエ不義理のありッたけ仕盡して、あげくの果は先生を斯ういふ酷い目に逢はしやがッたンですな」

星影先生、みるく〳〵兩眼に涙を含んで無念の齒を嚙み占めしが、果は堪へす其まゝ男泣きの聲をあげて打伏しぬ、

はや夜の一時を過ぎしころ、三度借越の齒代もろとも俥は帳場へ返して、大願成就の伸し餅を荷ぎ嗅へ不意の土產を携へながら、聊か酒氣を帶びて歸り來りし熊公、見れば流石に今夜一年の最終なり、大晦日も元日も同じ浮世に用なき筈なれど、さて何とやら落着いて寢られぬものか、いつにない事、長屋の兩側より障子越に豆ランプの灯影、ぽッと照らしぬ、

「こいつァ景色が宜いわい、どうか年中かうしてエもンだ、おい俳優さン、定めし女の方から春着でも仕送ッて來たらうな、はゝゝゝおい石作さン、まだ起きてるかね」

色狂者は例の一件以來、うッかり物も得言はねど、呼ばれし千三屋の石作、寢ながら表障子を開けて熊公の體を見るや否、むくりと起き直りぬ、

「や、熊さン、大變な勢ひだね、ぷンと酒香がするぜ、こりやァ驚いた、加之も荷いでるなァ餅だね、二枚だな、おまけに片手も何か、提げてるぢやァないか、全體どうしたンだい」

「なさけねエなァ、年の暮に伸し餅二枚を荷いで歸りやァ、急に起き直ッて全體どうしたと、いふ奴も奴だが、また不審を打たれる乃公も乃公だァ、しかし石作さン、一蓮托生お互のこッたよ、もし手許に無きやァ明日の朝、ちよいと來なせエ、せめ

て正月の眞似事でもしようぜ、はゝゝゝ」
「ありがたい、が、七年目、どッこい、待ッた、辛抱は此處だ、うか〳〵餅は食はれないぞ」
「何、うか〳〵食はれねエ、どッこい七年目だァ、何のこッた」
「實ァ熊さン、思召は千萬ありがたいがね、この石作、考へて見ると餅のない年の暮が七年も續いたよ、ところが人間は總て七年を浮き沈みの境界といふ勘定で、ことしに限ッて猶更ら未練らしく餅を食ッちやァ折角、出直す來年の運に差響くからね、御芳情だけ頂戴して置かう」
「はゝゝゝこゝ七年や十年で芽の吹き出しさうな面ぢやァねエよ、諦めて食ッた方が宜からうぜ、もし出直して來る運がありやァ、一旦この世を死ンで仕舞ッて生れかはッた二度目のこッた」

「いや、お禮だけ申し上げて置かう」
「嫌なら止しやァがれ、わざ〳〵誰が賴ンで食ッて貰ふ奴があるけエ、この千三野郎め」
かくと聞くや否、ごそ〳〵と這ひ出せし朝鮮髯、障子を開けて首を突き出しぬ、
「熊さン〳〵、こゝに一人、心魂に徹して有難く食ふ奴が居るよ、どうか千三屋の分と二人前を引受けたいもンだ、拙者元來その方の職業だが、かゝる場合に運氣の事は言はないよ、はゝゝゝ」
鑛糞の西川は負け惜しみに面は出さねど、こゝにも一人ありとの事、障子を洩れて聞ゆる咳拂ひの聲高し、
「えへン」
お虎婆は例の因業、どうせ自己は交際外れと高を括ッての惡まれ口、

「やれ〳〵、伸し餅二枚で長屋中の大騒動だ、もし軍鷄の一羽も舞ひ込ンで來りやァ氣絶するだらう」

女房お菊は待ち兼ねて豆ランプを手に持ちながら立出でぬ、

「良人さン、今お歸りか、氣をお付けなさい脚下が危いよ」

「まァ妾、こンな嬉しい事はないよ、せめて一枚、それもね、どうかと思ッて居た伸し餅が二枚で、また別に妾へ・平常の日でも無いにさ、もう〳〵これで死ンでも宜いよ、かういふお茶で甘納豆を喫べたのは良人さンと夫婦になッた翌日、そら、あの大雪の降ッた朝ね、あの時ッきりだもの、きッと良人さン、この元日も雪になるよ」

「なさけねエ事をいふない、乃公だッて米の飯に不足が無きやァ、朝夕の茶うけに喰

はしてやらァ」

「いゝえさ、妾はね、そンな贅澤は入らないよ、たゞ良人さンさへ機嫌よく働いてくれて、願望は年に一度か二度で結構、それも出來る時でさ、實は今日だッて、この押詰ッた年の暮の寒い中を、わざ〳〵稼ぎに出したくは無かッたよ、あとで後悔したくらゐだよ」

「わかッてらい、うるせエなァ」

「しかしね良人さン、あンなに吐鳴り散らてし這入ッて來たから、まさか捨てゝも置けまいさ、一枚だけは覘はれてるよ、無いも同じこッたよ」

「宜いぢやァねエか、夫婦で一枚ありやァ正月の眞似事ァ濟むさ、口で何を吐したッて千三の野郎にも分けてやる心算だ、八卦屋と鑛糞と色狂者と、お虎婆も數に入れてよ、心持よく都合五切に切ッて配らうぜ」

「眞實に良人さンは、人が善いよ」

「はゝゝゝうぬが嗅アに譽められりやァ澤山だ、や、時に今夜、出喰はしたぜ、厩橋の河岸ッ端で、先生によ」

「おや、あの先生に」

「あれこそ人が善いンだな、つまり斯うだ、いはねェ事か案の定、あの阿魔ッちよにして遣られてね、千住の先の裏長屋へ一時、ちよいと夫婦氣取で九尺二間を持ッたさうだが、たゞ眼前の取るものを取ッて遁げるといふ女なら、まだしも、畜生ッ、太エ女だぜ、いよ〳〵詰ッた結句の果に先生が、實ァ田舍に一反の田地があると口を辷ッた、すると彼女、忽地その手へ喰ひ付いて、たゞァ置かねェ、わざ〳〵先生を巧く田舍へ追ひ遣ッてさ、その田地を百三十圓とかに賣らせてよ、持ッて歸ッた二日目の夜、つい近所へ買物に出たまゝ行方知れずとなりにけりだ、えゝおい、どうだい、無論、身體ばかりぢやァねェ金もろともだ、可哀さうに先生の手許へ殘ッたなァ十二圓あまりと聞いて乃公ァ、腹ン中の臟腑が煮ッくり返るやうだ、ぶるぶる顫へたぜ」

「あら、まァ、とンでもない女だねェ、しかし先生も先生だよ、じれッたい、あンまり甘過ぎるからさ、全體どこが氣に入ッたンだらう、あンな嫌な廂髪の摺れッからしがさ」

「そこが先生だよ、いくら學問があッても何でも、あの通り世ン中に疎くッて、初心だからな、無理もねェが相手の阿魔ァ底の底まで念の入ッた酷い女だぜ、乃公ァ見付け次第、横ッ面の二擊三擊ぢやァ承知しねェ決心だ」

「眞實だよ、妾だッて、喰ひ付いてやるよ、ところで先生、今、どこに、どうして居なさるの」

「どこに今、どうしてといふ、その居所は偖置いて、もはや世の中に身の置どころもねエといふ、危ねエ河岸ッ端を助けたンだ、そこで兎も角も無理に居酒屋へ連れ込ンで以上の談話を聞いたンだが、幸ひ今夜ァ運に叶ッて、まだ三貫の錢が殘ッてるからな、淺草町の木賃宿まで送り届けて來たのよ、例の麵麭宵や燒芋の蓐せエ工面に盡きて仕舞ッて、まる三日の間、飲まず食はずに茫然と歩いたさうだ、ばう〳〵と髯は生える眼は窪ンで頰骨が飛び出してね、この寒中に襤褸の袷一枚の素肌よ、おッと、近火々々、袷の素肌ァ常然だなァ、嚊ァ、世間一般だ」

「ほゝゝゝ世間一般だから妾も、不足は言ッて居ませンよ、御安心なさい」

去年の一切萬事、さらりと西の海へ放り投げて、年と共に新なる東の空より、ぬッと初日出の目出たさ、正月の松のうち翠の色も相變らず御慶を申す三日間は、いよ〳〵

世間の手前、出るに出られぬ腕を組んで八軒長屋の奥に閉ぢ籠る奴さへ、流石に何とやら心ばかりは春めいたり、

まして長屋中いづれも平生とは違ひ一年の人事最始、おの〳〵舊臘のうちに身分相應の神算鬼謀を廻らして、まづ三日籠城の兵糧だけは無事に貯へたれど、さて餅にまでは手も足も屆かぬといふところへ、伸し餅一枚を五切に配りし熊公、猶更心地よく朝より鼻唄まじりの口三味線、

「どうで御坐いますな、お菊さン、うまいもンだらう、これでも二十四五の昔は隨分小意氣に乙な熊さンだッたよ、まンざらの野暮でもねエからな、はゝゝゝ」

「おや、お菊さン、聞いたやうな名だッけ、全體、どこの女だらう」

「はゝゝゝ正月早々、おい嚊ァも聊か失禮だと心得て、ちよいと改まッて見たのさ、はゝゝゝしかし何だか今年ァ氣が面白くッて堪らねエ、わづか一枚の餅にしろ、

同じ浮世の一枝に巣を作ッて棲む長屋中へ配ッてよ、あれば飲める筈の酒も、その錢を人助けのために出して仕舞ッたと思やァ、醉ッた心持より乃公ァ嬉しいぜ、ねエ、おい、嗅ァ、今日だけ宗旨を變へて、や、美味さうだな、甘納豆の仲間入でもしようか」

「さァ〳〵、今お茶を入れるからね、御遠慮なしに手を御出しなさい」

「だが、今やッと餅を喰ッた後で、また甘納豆は少々恐れるね、胸が惡くなりやァしめエか」

「さう良人さン、心配するなら、やはり傍で默ッて、おとなしく神妙に見物した方が宜いでせう」

「たゞ見物も殘念だよ、業腹だなァ、一番、うンと度胸を据ゑて、ちよッぴり食ッてやらう」

をりしも長屋の入口より靴の音、いかに狼狽へても洋服の禮者が舞ひ込む筈なし、はて不思議と思ふうち、我家の門口に立停りし一人の巡査、じろりと差覗くや否、

「おい、辻俥を曳いて出る熊吉といふのは汝だな、すぐ其儘で宜いから警察署まで來い」

女房お菊、はッと驚いて目を剝き出せば、熊公も思はず顏色を變へながら、俄に膝頭を縮めて這ひ出しぬ、

「だゝ旦那、いくら下種ッぽく貧乏したッて警察へ何も、この正月の二日から呼び出されるやうな、そンなもンぢやァ御坐いませンよ、へエ、どうか旦那その理由を」

「たゞ來れば宜いンだ、早く出い」

「だッて旦那、じよう戯談を」

「こらッ、戯談とは何だ、すぐ來い」